

第2章 本論

【研究1】わが国における幼児の運動実施状況と近隣環境の現状および課題

1. 背景

今日、わが国では経済や科学技術の飛躍的な発展により人々の生活は豊かで便利になった。それに伴って、社会環境や生活様式は大きく変化し、子どもたちの生活から運動遊びやスポーツ、活動的な身体活動の機会を減少させているといわれている。したがって、子どもの運動促進や体力向上政策の検討には、幼児期の段階から生活環境も含めた運動実施状況の把握が求められてきた。笹川スポーツ財団では、国内の幼児の運動実施状況を把握できる全国データとして「4～11歳のスポーツライフに関する調査」を2009年から2年に1度のペースで実施してきたが、運動発達が顕著な3歳児の運動遊びの実態に加えて、保護者の生活状況やそれらを取り巻く環境要因は把握されていなかった。

その課題を克服するため、笹川スポーツ財団では2024年度、「全国の幼児(3～6歳)を対象とした運動実施状況に関する調査研究」が実施された。この研究では、全国の市区町村に在住する3～6歳(の保護者)3,000人以上が二段階抽出法によって抽出され、幼児の体を動かす遊びや運動の実施状況と、生活環境、情緒・行動特性、社会経済的要因などについて詳細に調査がなされた。その研究によって、幼児の運動実施状況に関して、以下のような現状が明らかになった。

- ・ 1週間のうち園外で「1日も外遊びをしていない」幼児が8.1%存在する。
- ・ 平日に園外で「全く外遊びをしない」幼児が46.6%存在する。
- ・ 幼児の7割が「物を打つ動き」、6割が「逆さまになる動き」を十分に経験していない。

また、幼児の運動実施状況と家庭内レベルの要因との関連の中で、「両親ともに週1日以上運動・スポーツをしている家庭の幼児は、運動時間が長い」ことなども示された。このような知見を、全国レベルの調査により明らかにしたことは、わが国における幼児の運動実施の現状と重要性、およびそれに対してどのような要因に焦点をあてて対策をしていくべきかという視点において、大変重要な知見であるといえる。

身体活動には個人、集団、環境等の異なる要因が関わりと考えられている。その考え方は、エコロジカル(生態学的)モデルと言われ、行動に影響する決定要因を、「個人レベル要因」、「個人間レベル要因」、「組織レベル要因」、「地域社会レベル要因」、「政策レベル要因」と、多様かつ階層的に捉え、複数レベルの要因を取り込んだ介入の重要性を指摘している。その介入を行うためにはまず、身体活動を規定する要因をエコロジカルモデルにあてはめて明らかにする必要がある。

しかしながら、幼児の運動実施に関しては、個人レベルや個人間レベル、組織レベルでの関連性を明らかにした研究は数多く報告されているが、地域の公園や遊び場の整備状況、交通環境、安全性などの地域社会レベルの要因との関係については十分に検討されていないのが現状である。近隣環境が幼児の運動機会にどのように関連しているのかを明らかにすることは、自治体レベルでの政策立案やインフラ整備を行う上で重要な情報となる。また、近隣環境要因が幼児の運動行動との関連性を明らかにすることで、家庭や保育施設だけでなく、地域全体で幼児の運動習慣を促進する方策の検討が可能となる。

したがって本研究では、全国の市区町村に在住する3～6歳の幼児における運動実施状況と近隣環境との関連性を明らかにし、さらに、幼児の運動実施を規定する要因をエコロジカルモデルにあてはめて探索的に分析することを目的とした。本研究の成果は、幼児が豊富な運動習慣形成のために重点を置くべき領域を示し、今後の施策に貢献することが期待される。

2. 結果

(1) 対象とした幼児の基本属性

本研究で分析に含まれた幼児は 2,747 人であった。そのうち、男子が1,368、女子が1,379であった。また、郊外(4,000人/km²未満)の郵便番号界に居住していた者が1,071人、都市部(4,000人/km²以上)の郵便番号界に居住していた者が1,676人であった。

図表2-1に分析対象とした幼児の特徴を示した。分析対象とした幼児は、年少から年長児までで、性別の割合は男子49.8%、女子50.2%であった。スクリーンタイムの中央値は、平日では 1～2時間未満(32.9%)で最も多く、次いで 30 分～1時間未満(23.0%)、休日では 2～3時間未満(25.9%)が最も多く、次いで 1～2時間未満(25.3%)となった。親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度は「月 1～3回」が 38.3%と最も多く、「週 1～2回」(35.4%)が続いた。就園状況では、幼稚園に通う幼児が 43.1%、保育園が 38.4%、認定こども園が 16.1%であった。また、運動・スポーツの習いごとに参加している割合は 33.9%であった。

次に、図表2-2と図表2-3に分析対象とした幼児の運動時間、家族環境、近隣環境について、全体、郊外・都市部別、性別に示した。幼児の運動時間の中央値は、総運動時間は340分/週、平日運動時間は150分/週、休日運動時間は180分/週であった。習いごと運動時間は、人口密度が高い地域のほうがやや長い傾向があり、統計的に有意な差が認められた。また、平日の運動時間にもわずかに有意な差がみられたが、総運動時間や休日運動時間には有意な差はなかった。性別にみると、総運動時間の中央値は男子が360分/週、女子が320分/週であり、外遊び時間の中央値は男子が200分/週、女子が180分/週と、男子の方がやや長い傾向があった。一方、室内・屋内での運動遊び時間や習いごと運動時間は男女ともに中央値が同じであった。

郊外と都市別にみると、家族環境に違いがみられた。きょうだいの人数やママ友・パパ友の人数に有意な差があり、人口密度が低い郊外の地域ではきょうだいが多い傾向がみられた。きょうだいの人数は0人が32.1%(郊外:30.3%、都市:33.3%)、1人が 46.5%(郊外:43.8%、都市:48.2%)、2人が18.2%(郊外:21.9%、都市:15.9%)、3人以上が 3.2%(郊外:4.0%、都市:2.7%)であった。ママ友・パパ友の人数は0人が 49.7%(郊外:51.8%、都市:48.3%)、1～2人が19.1%(郊外:19.5%、都市:18.9%)、3人以上が 31.2%(郊外:28.7%、都市:32.8%)であった。都市部の方が育児を通じた親同士の交流が活発である可能性が示唆された。

近隣環境については、人口密度、公園密度、スポーツ施設密度、公共交通機関密度など、多くの項目で郊外と都市部では有意な差が認められた。都市部では公共施設の密度が高い一方で、緑の割合が低く、犯罪発生率が高いことが特徴的であった。対照的に、郊外では緑の多い環境が保たれているが、公共施設の整備状況が都市部に比べて低いことが確認された。

これらの結果から、人口密度の違いが幼児の運動習慣や社会環境と関連している可能性が示唆される。また、性別による運動時間の違いも確認され、今後の幼児の運動促進施策において考慮すべき点となる。

【図表2－1】 分析対象とした幼児の特徴(名義尺度と順序尺度)

変数名	全体		4千人/km ² 未満		4千人/km ² 以上		p値 ^a	男子		女子		p値 ^a		
	度数	%	度数	%	度数	%		度数	%	度数	%			
【個人レベル】														
年齢														
年少（3歳児）	913	33.2	371	34.6		542	32.3	0.214	452	33.0	461	33.4	0.894	
年中（4歳児）	922	33.6	339	31.7		583	34.8		456	33.3	466	33.8		
年長（5歳児）	912	33.2	361	33.7		551	32.9		460	33.6	452	32.8		
性別														
男子	1368	49.8	537	50.1		831	49.6	0.776						
女子	1379	50.2	534	49.9		845	50.4							
平日スクリーンタイム（分/日）														
30分未満	572	20.8	223	20.8		349	20.8	0.712	261	19.1	*2	311	22.6	*1
30分～1時間未満	632	23.0	232	21.7		400	23.9		292	21.3	*2	340	24.7	*1
1～2時間未満	904	32.9	350	32.7		554	33.1		479	35.0	*1	425	30.8	*2
2～3時間未満	452	16.5	187	17.5		265	15.8		226	16.5		226	16.4	<0.001
3～4時間未満	123	4.5	54	5.0		69	4.1		65	4.8		58	4.2	
4～5時間未満	33	1.2	13	1.2		20	1.2		21	1.5		1	0.1	
5時間以上	31	1.1	12	1.1		19	1.1		24	1.8	**1	7	0.5	**2
休日スクリーンタイム（分/日）														
30分未満	382	13.9	141	13.2		241	14.4	0.117	175	12.8		207	15.0	
30分～1時間未満	379	13.8	142	13.3		237	14.1		177	12.9		202	14.6	
1～2時間未満	695	25.3	251	23.4		444	26.5		332	24.3		363	26.3	
2～3時間未満	711	25.9	281	26.2		430	25.7		370	27.0		341	24.7	0.002
3～4時間未満	336	12.2	146	13.6		190	11.3		168	12.3		168	12.2	
4～5時間未満	135	4.9	61	5.7		74	4.4		73	5.3		62	4.5	
5時間以上	109	4.0	49	4.6		60	3.6		73	5.3	**1	36	2.6	**2
【個人間レベル】														
親子で遊ぶ頻度														
全くなし	335	12.2	128	12.0		207	12.4	0.527	180	13.2		155	11.2	
月1～3回	1051	38.3	417	38.9		634	37.8		498	36.4		553	40.1	
週1～2回	972	35.4	362	33.8		610	36.4		488	35.7		484	35.1	0.189
週3～4回	209	7.6	88	8.2		121	7.2		104	7.6		105	7.6	
ほとんど毎日	180	6.6	76	7.1		104	6.2		98	7.2		82	5.9	
親の運動習慣														
どちらの親も週1日未満	1419	51.7	553	51.6		866	51.7	0.644	680	49.7		739	53.6	
片方の親のみ週1日以上	566	20.6	227	21.2		339	20.2		304	22.2		262	19.0	0.093
両親ともに週1日以上	430	15.7	157	14.7		273	16.3		223	16.3		207	15.0	
どちらかが「わからない」	332	12.1	134	12.5		198	11.8		161	11.8		171	12.4	
等価所得														
Q1	710	25.8	337	31.5	**1	373	22.3	**2	357	26.1		353	25.6	0.495
Q2	742	27.0	322	30.1	**1	420	25.1	**2	353	25.8		389	28.2	
Q3	634	23.1	224	20.9	*2	410	24.5	*1	<0.001	317	23.2	317	23.0	
Q4	661	24.1	188	17.6	**2	473	28.2	**1		341	24.9	320	23.2	
最終学歴														
どちらの親も大卒未満	965	35.1	479	44.7	**1	486	29.0	**2	473	34.6		492	35.7	0.715
どちらかの親が大卒以上	1768	64.4	588	54.9	**2	1180	70.4	**1	<0.001	889	65.0	879	63.7	
どちらかが「わからない」	14	0.5	4	0.4		10	0.6			6	0.4	8	0.6	
【組織レベル】														
就園状況														
幼稚園	1185	43.1	361	33.7	**2	824	49.2	**1	578	42.3		607	44.0	0.756
保育園	1054	38.4	445	41.5	**1	609	36.3	**2	526	38.5		528	38.3	
認定こども園	442	16.1	232	21.7	**1	210	12.5	**2	<0.001	228	16.7	214	15.5	
その他	15	0.5	10	0.9	*1	5	0.3	*2		9	0.7	6	0.4	
在園していない	51	1.9	23	2.1		28	1.7			27	2.0	24	1.7	
運動の習いごとへの所属														
はい	932	33.9	292	27.3	**2	640	38.2	**1	<0.001	449	32.8	483	35.0	0.223
いいえ	1815	66.1	779	72.7	**1	1036	61.8	**2		919	67.2	896	65.0	

a: χ^2 検定, *1: 調整後の残差>1.96 (p<0.05), **1: 調整後の残差>2.58 (p<0.01), *2: 調整後の残差<-1.96 (p<0.05), **2: 調整後の残差<-2.58 (p<0.01)。

【図表2－2】 分析対象とした幼児の特徴(連続尺度:全体、郊外・都市部別)

変数名	全体			4千人/km ² 未満			4千人/km ² 以上			p値 ^a
	第1四分位	中央値	第3四分位	第1四分位	中央値	第3四分位	第1四分位	中央値	第3四分位	
【個人レベル】										
総運動時間（分/週）	180	340	600	180	330	590	180	345	600	0.494
外遊び時間（分/週）	105	180	340	105	181	320	105	180	360	0.744
室内遊び時間（分/週）	0	70	210	0	70	210	0	60	210	0.167
習いごと運動時間（分/週）	0	0	60	0	0	45	0	0	60	<0.001
平日運動時間（分/週）	15	150	300	5	135	300	20	150	320	0.033
休日運動時間（分/週）	120	180	300	120	180	300	120	180	300	0.180
【個人間レベル】										
きょうだいの人数	0	1	1	0	1	2	0	1	1	<0.001
ママ友・パパ友の人数	0	1	3	0	0	3	0	1	3	0.027
労働時間（1人当たりの時間/週）	38	43	50	37	43	50	38	43	50	0.364
【地域社会レベル（地域環境）】										
人口密度（人/km ² ）	2101.5	5678.0	10699.3	500.5	1425.7	2732.3	6245.0	9284.1	13748.4	<0.001
ADI	5.4	6.1	6.7	5.9	6.5	7.0	5.1	5.8	6.5	<0.001
公園の密度（個/km ² ）	0.0	2.4	6.6	0.0	0.2	1.4	1.7	5.1	8.5	<0.001
スポーツ施設の密度（個/km ² ）	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	2.3	<0.001
袋小路の密度（個/km ² ）	8.4	21.6	46.3	5.5	12.6	24.0	13.2	34.2	61.4	<0.001
交差点の密度（個/km ² ）	90.4	170.9	249.8	36.1	76.4	122.3	174.8	227.1	286.2	<0.001
公共交通機関の密度（個/km ² ）	1.5	4.4	8.0	0.6	2.2	4.1	3.4	6.5	9.8	<0.001
緑被率（km ² /km ² ）	0.1	0.2	0.3	0.2	0.3	0.4	0.1	0.2	0.3	<0.001
面積当たりの軽犯罪発生件数（件/km ² ）	5.7	29.0	87.4	0.5	3.8	12.7	30.8	68.1	138.8	<0.001

注)ADI:地理的剥奪指標。a:Mann-Whitney の U 検定。

第1四分位:データの低位25%(1/4)の値、中央値:データの真ん中の値(全データを並べたときの中央)、第3四分位:データの上位25%(3/4)の値、p値:2つのグループ(4千人/km²未満 vs 4千人/km²以上)で統計的に有意な差があるかを示す値

きょうだいの人数:0人が32.1%(郊外:30.3%、都市:33.3%)、1人が46.5%(郊外:43.8%、都市:48.2%)、2人が18.2%(郊外:21.9%、都市:15.9%)、3人以上が3.2%(郊外:4.0%、都市:2.7%)／ママ友・パパ友の人数:0人が49.7%(郊外:51.8%、都市:48.3%)、1～2人が19.1%(郊外:19.5%、都市:18.9%)、3人以上が31.2%(郊外:28.7%、都市:32.8%)

【図表2－3】 分析対象とした幼児の特徴(連続尺度:性別)

変数名	男子			女子			p値 ^a
	第1四分位	中央値	第3四分位	第1四分位	中央値	第3四分位	
【個人レベル】							
総運動時間（分/週）	180	360	600	180	320	570	0.049
外遊び時間（分/週）	110	200	360	100	180	330	0.063
室内遊び時間（分/週）	0	70	215	0	70	210	0.931
習いごと運動時間（分/週）	0	0	60	0	0	60	0.552
平日運動時間（分/週）	15	150	320	20	140	300	0.158
休日運動時間（分/週）	120	190	300	110	180	300	0.095
【個人間レベル】							
きょうだいの人数	0	1	1	0	1	1	0.394
ママ友・パパ友の人数	0	0	3	0	1	3	0.658
労働時間（1人当たりの時間/週）	38	43	51	37	43	50	0.232
【地域社会レベル（地域環境）】							
人口密度（人/km ² ）	2100.5	5604.2	10593.5	2130.0	5723.8	10784.8	0.637
ADI	5.4	6.1	6.7	5.4	6.1	6.7	0.987
公園の密度（個/km ² ）	0.0	2.4	6.5	0.0	2.3	6.6	0.444
スポーツ施設の密度（個/km ² ）	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	1.5	0.057
袋小路の密度（個/km ² ）	7.9	21.2	45.8	8.9	22.1	46.9	0.393
交差点の密度（個/km ² ）	91.1	169.8	246.7	89.5	171.5	254.1	0.306
公共交通機関の密度（個/km ² ）	1.4	4.4	7.9	1.6	4.4	8.1	0.278
緑被率（km ² /km ² ）	0.1	0.2	0.3	0.1	0.2	0.3	0.484
面積当たりの軽犯罪発生件数（件/km ² ）	5.4	28.7	87.2	5.9	29.5	90.1	0.578

注)ADI:地理的剥奪指標。a:Mann-Whitney の U 検定。

第1四分位:データの低位25%(1/4)の値、中央値:データの真ん中の値(全データを並べたときの中央)、第3四分位:データの上位25%(3/4)の値、p値:2つのグループ(4千人/km²未満 vs 4千人/km²以上)で統計的に有意な差があるかを示す値

(2) エコロジカルモデルを用いた幼児の園外での運動時間と関連する要因探索

2-1) 幼児の園外での総運動時間に関連する要因

【ポイント】

● 幼児の総運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 両親が週1日以上運動をしている
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

● 幼児の総運動時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 親の最終学歴が高い
- ・ 認定こども園に通っている

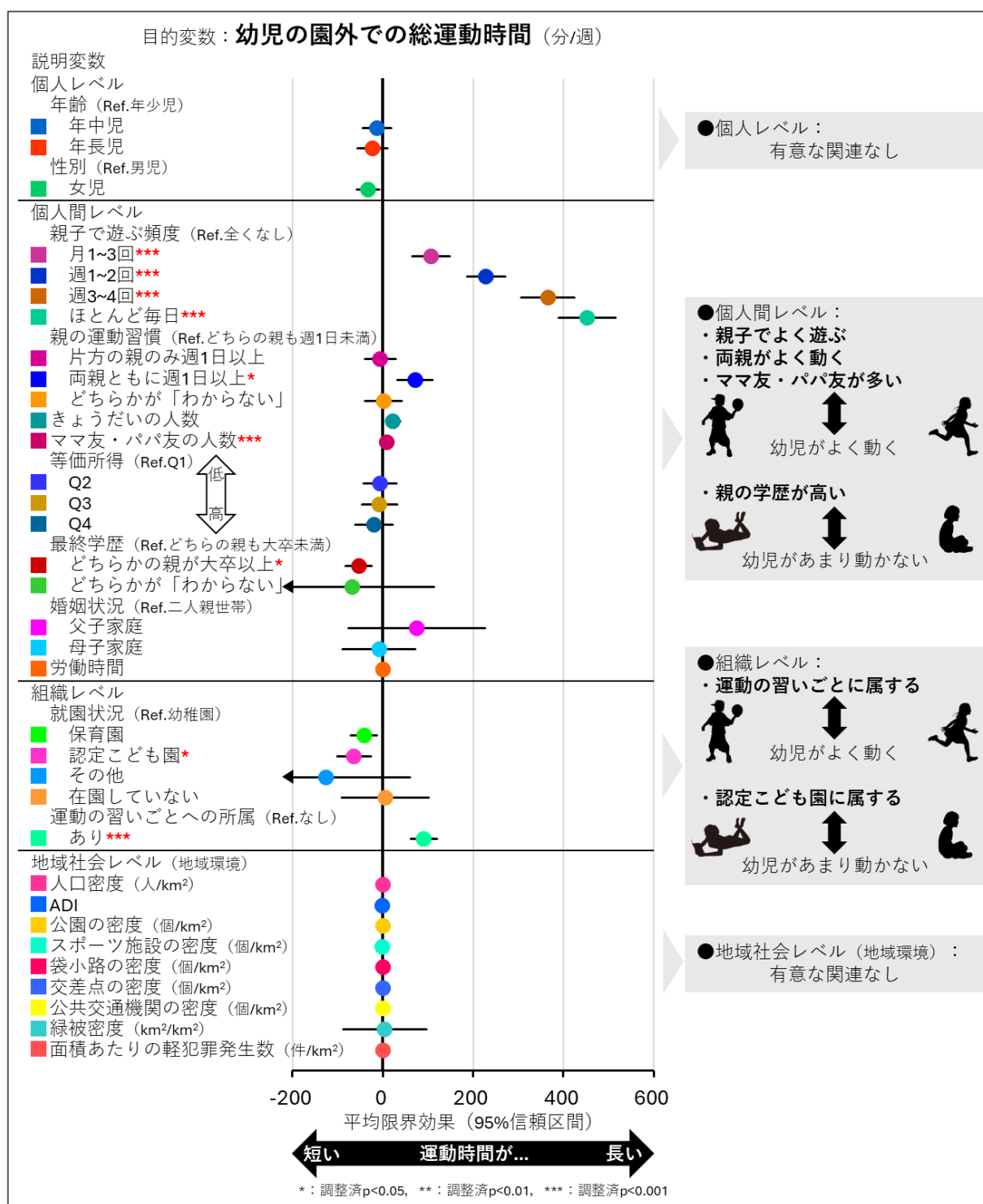
図表2-4に幼児の園外での総運動時間に関連する要因を示した。総運動時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、両親の運動習慣、保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、幼児の園外での総運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが幼児の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、両親が週1日以上運動をしている家庭では、幼児の総運動時間が長いことが示され、保護者の運動習慣が幼児の運動実施に影響を与えている可能性がある。

さらに、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、幼児の総運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが幼児の運動機会の創出に影響を与えている可能性がある。また、運動・スポーツの習いごとに参加している幼児では、総運動時間が長い傾向がみられ、組織的な運動活動が幼児の運動機会の確保に寄与している可能性がある。

一方で、親の最終学歴が高い家庭では、幼児の園外での総運動時間が短い傾向が認められた。また、認定こども園に通っている幼児では、園外での総運動時間が短い傾向がみられた。

【図表2-4】 幼児の園外での総運動時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

2-2) 幼児の園外での運動場面ごとにみる関連要因 (外遊び、室内・屋内での運動遊び、運動・スポーツの習いごと)

①外遊び時間に関連する要因

【ポイント】

●幼児の外遊び時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 両親が週1日以上運動をしている
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

●幼児の外遊び時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 保育園に通っている

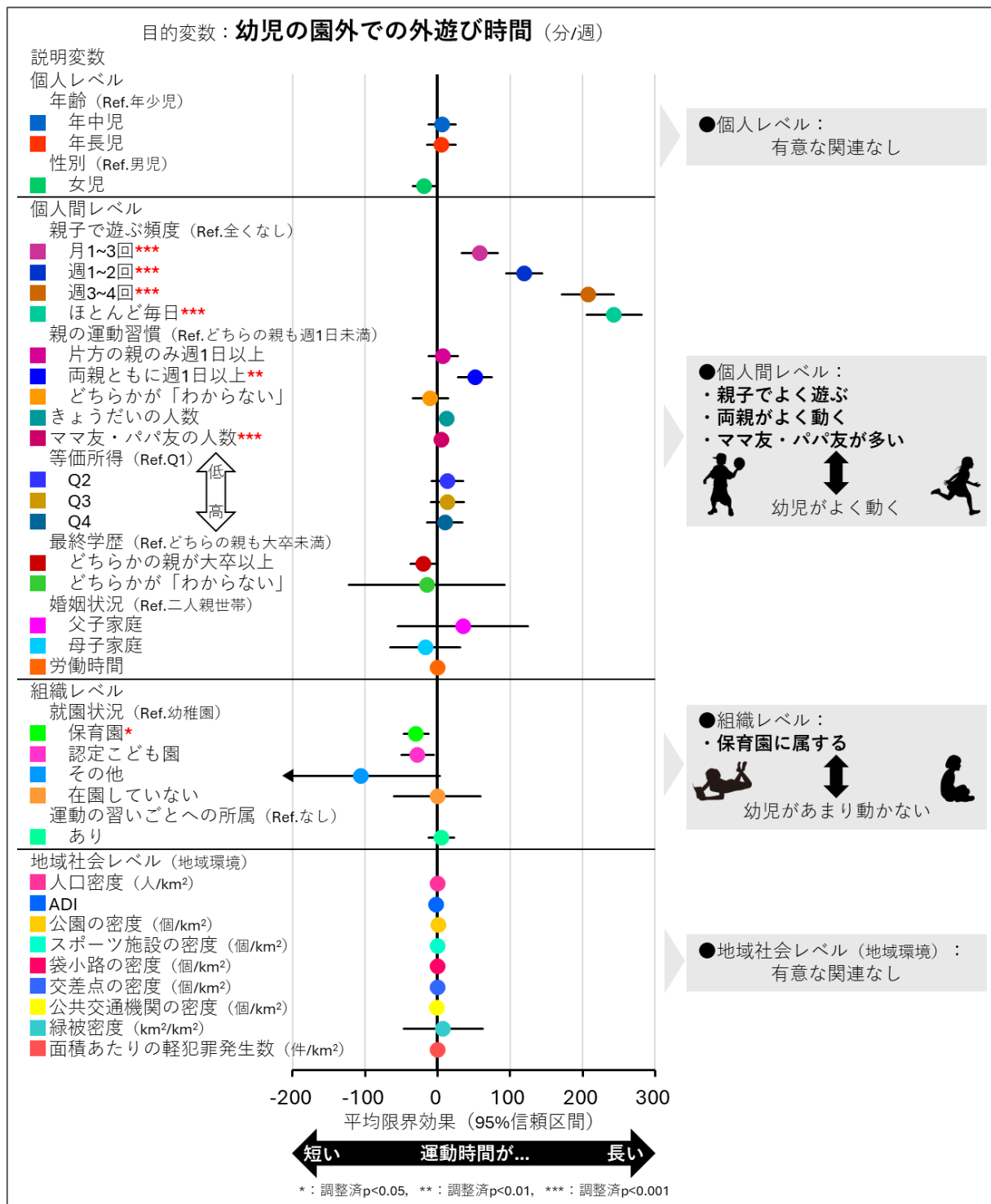
図表2-5に幼児の園外での外遊び時間に関連する要因を示した。外遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、両親の運動習慣、保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、幼児の外遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが幼児の外遊び機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、両親が週1日以上運動をしている家庭では、幼児の外遊び時間が長い傾向が認められ、保護者の運動習慣が幼児の運動実施に影響を与えている可能性がある。

さらに、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、幼児の外遊び時間が長い傾向が認められ、保護者同士のネットワークが幼児の運動機会の創出に影響を与えている可能性がある。

一方で、保育園に通っている幼児では、外遊び時間が短い傾向が認められた。

【図表2-5】 幼児の園外での外遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

②室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因

【ポイント】

● 幼児の室内・屋内での運動遊び時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い

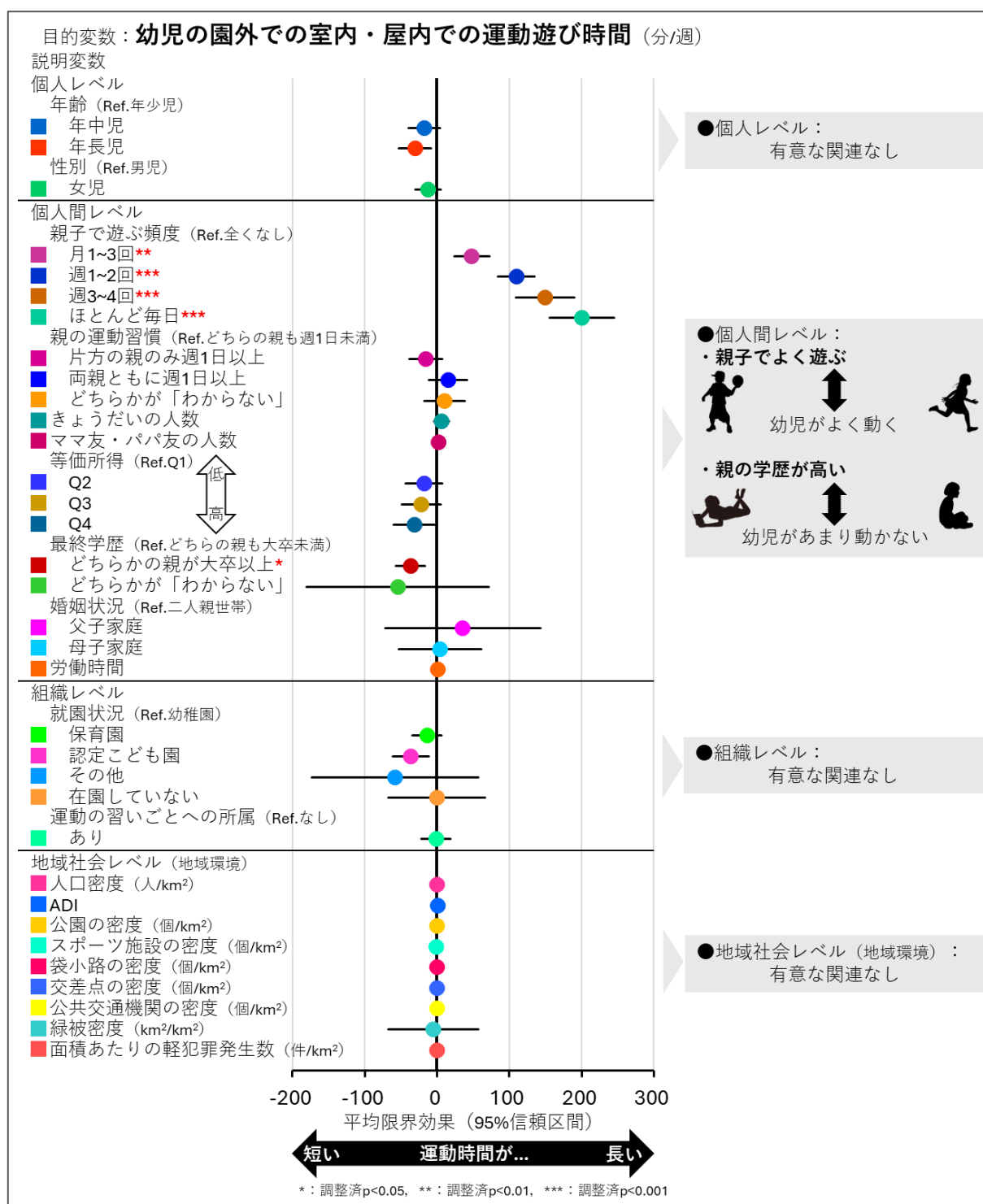
● 幼児の室内・屋内での運動遊び時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 親の最終学歴が高い

図表2－6に幼児の園外での室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因を示した。室内・屋内での運動遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルにおいて、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や親の最終学歴があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、幼児の園外での室内・屋内での運動遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが幼児の運動遊び時間の増加に寄与している可能性が示唆された。また、親の最終学歴が高い家庭では、幼児の園外での室内・屋内での運動遊び時間が短いことが示された。

【図表2－6】 幼児の園外での室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

③運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因

【ポイント】

●幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 年齢が高い
- ・ 両親が週1日以上運動をしている
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 等価所得が高い
- ・ 親の最終学歴が高い

●幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 保育園に就園している

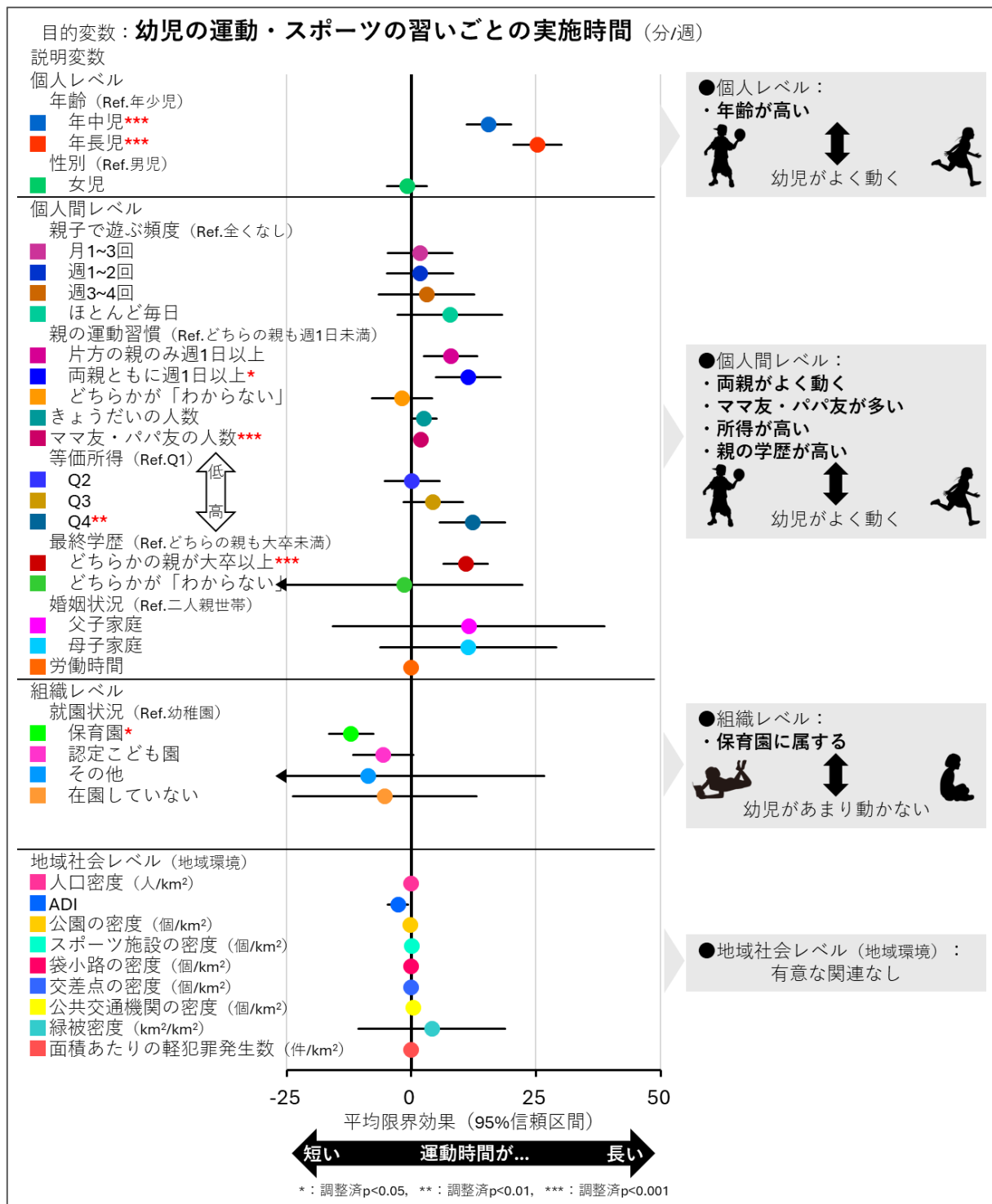
図表2-7に幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因を示した。運動・スポーツの習いごとの実施時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは年齢が、個人間レベルでは保護者の運動習慣、保護者同士のネットワーク、等価所得、親の最終学歴があげられた。一方、地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、年齢が高い幼児ほど、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向が認められ、成長とともに運動機会が増える可能性が示唆された。また、両親が週1日以上運動をしている家庭では、幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが示され、保護者の運動行動が子どもの運動習慣に影響を与えている可能性がある。

さらに、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向がみられ、地域の保護者同士のネットワークが、幼児のスポーツ活動の機会に影響を与えている可能性が示された。また、等価所得や親の最終学歴が高い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが明らかとなり、経済的・教育的背景が幼児のスポーツ活動に影響を及ぼしている可能性がある。

一方で、保育園に通っている幼児では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が短い傾向が示され、園での預かり時間が幼稚園よりも長い分、園外での習いごとの時間を確保することが難しい可能性がある。

【図表2-7】 幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

2-3) 平日における園外での運動時間に関連する要因

【ポイント】

●平日における幼児の運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 両親が週1日以上運動をしている
- ・ きょうだいの人数が多い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

●平日における幼児の運動時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 親の最終学歴が高い
- ・ 保育園や認定こども園に就園している

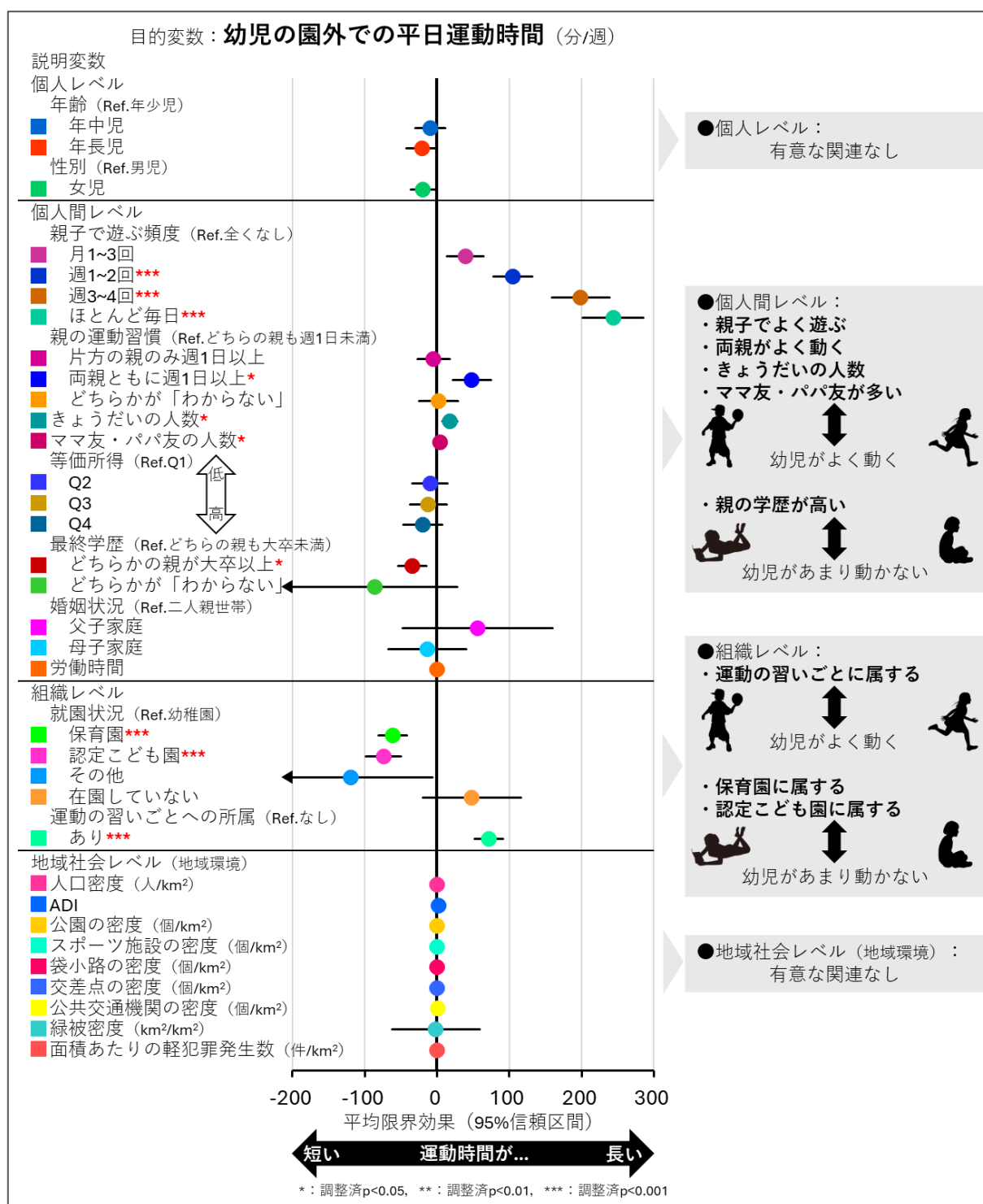
図表2-8に平日における幼児の園外での運動時間に関連する要因を示した。平日の園外での運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、両親の運動習慣、きょうだいの人数、ママ友・パパ友の人数が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、幼児の平日の園外での運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが日常の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、両親が週1日以上運動をしている家庭では、幼児の運動時間が長いことが示され、保護者の運動習慣が子どもの身体活動に影響を及ぼしている可能性がある。

さらに、きょうだいの人数が多い家庭では、幼児の運動時間が長い傾向がみられ、きょうだい間での遊びが運動機会の増加につながっている可能性が示された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、幼児の運動時間が長い傾向が認められ、保護者間の交流が子どもの運動機会を生み出している可能性がある。運動・スポーツの習いごとに参加している幼児も、運動時間が長い傾向がみられ、平日の園外での運動機会の確保に寄与している可能性が示唆された。

一方で、親の最終学歴が高い家庭では、幼児の運動時間が短いことが示された。また、保育園や認定こども園に就園している幼児では、平日の園外での運動時間が短い傾向がみられた。

【図表2－8】 幼児の園外での運動時間に関連する要因(平日)



注) AME(平均的限界効果)：ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差)：推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間)：統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス)：基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標)：地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

2-4) 休日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

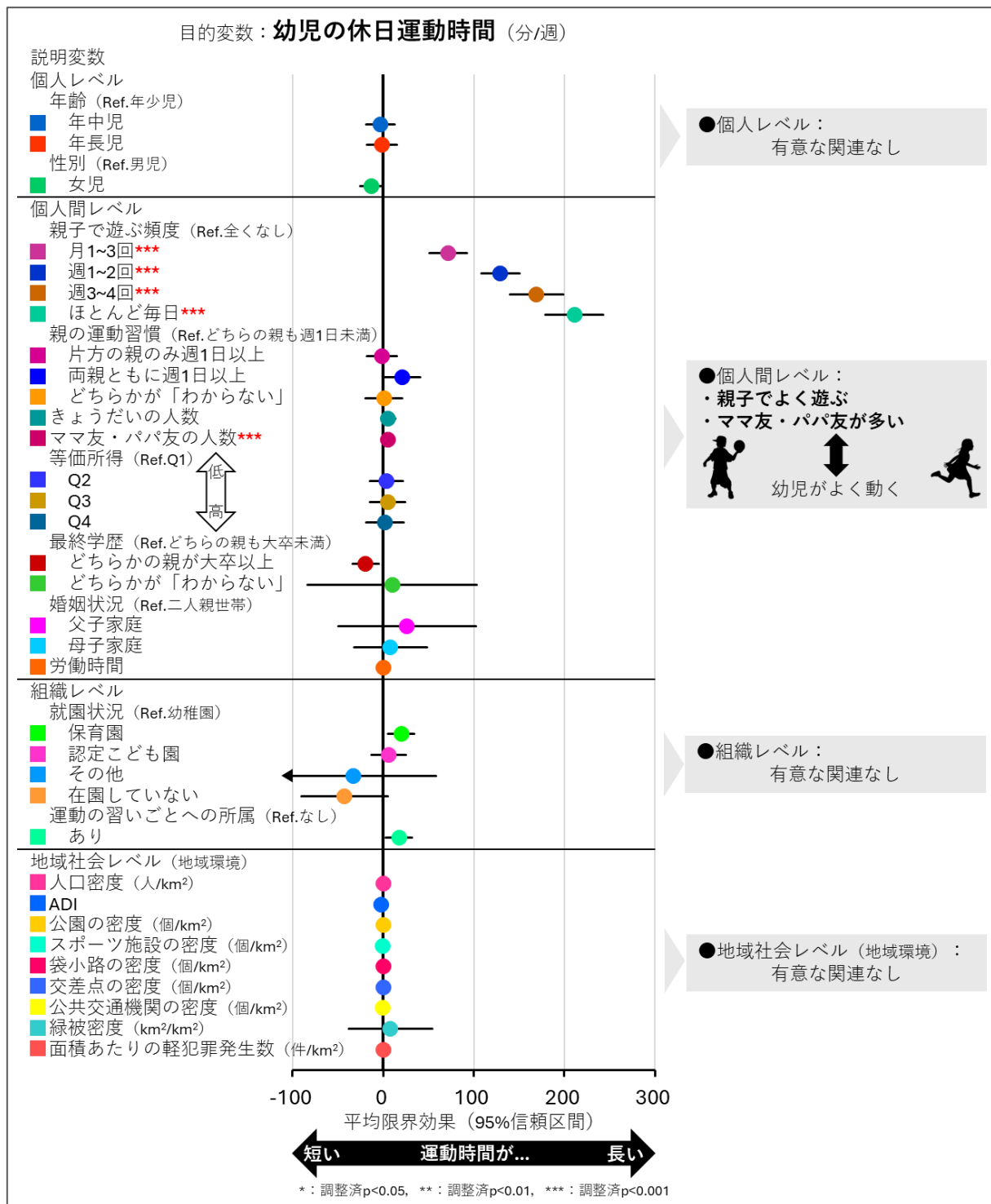
● 休日における幼児の運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

図表2-9に休日における幼児の運動時間に関連する要因を示した。休日の運動時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベルや組織レベル、地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、幼児の休日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが休日の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、幼児の運動時間が長い傾向が認められ、保護者の交流が子どもの運動機会に影響を与えている可能性がある。

【図表2－9】 幼児の園外での運動時間に関連する要因(休日)



注)AME(平均的限界効果)：ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差)：推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間)：統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス)：基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標)：地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

2-5) 平日におけるスクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

●平日における幼児のスクリーンタイムが短いことと関連がみられた要因

- ・ 女子である

●平日における幼児のスクリーンタイムが長いことと関連がみられた要因

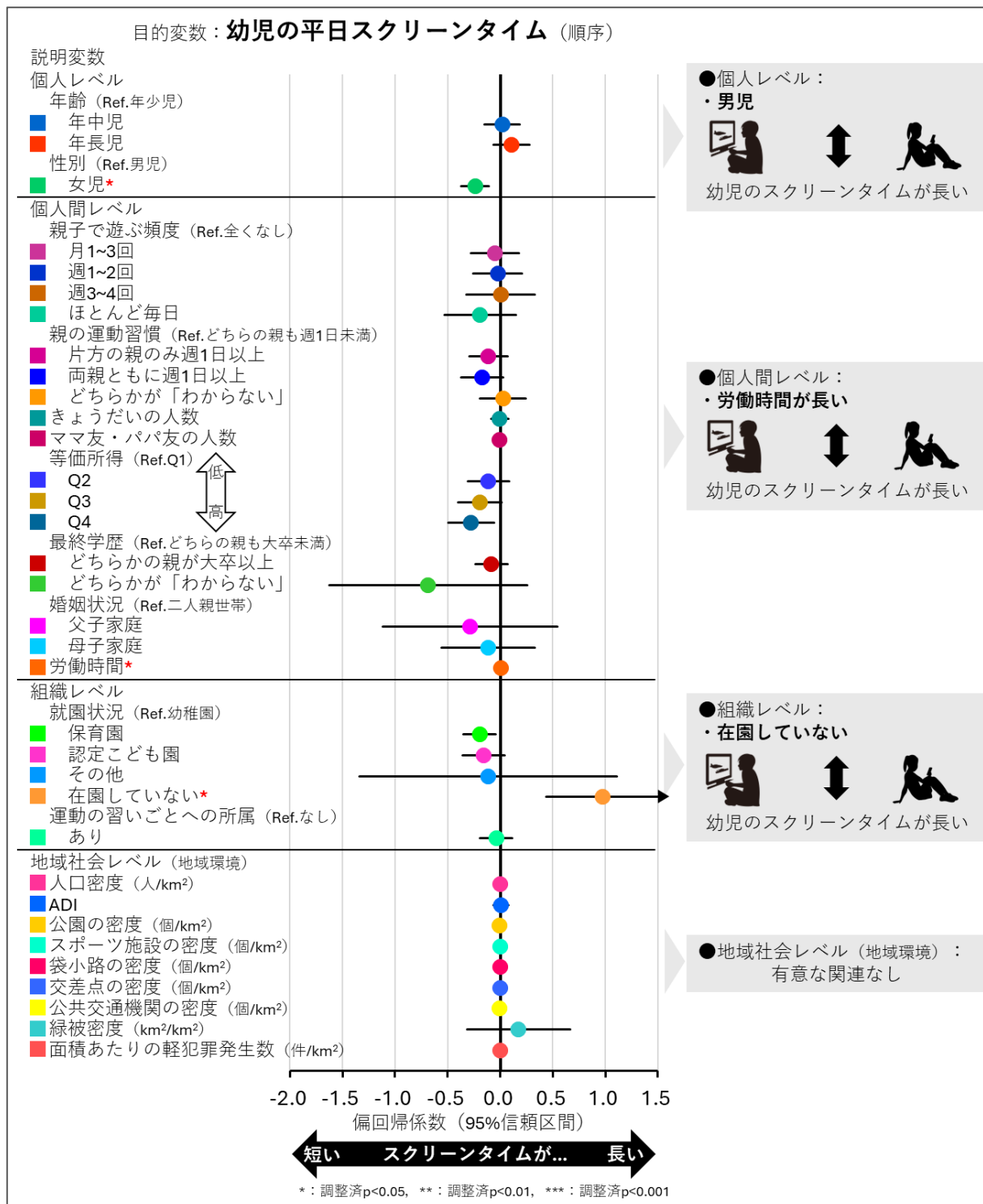
- ・ 両親の労働時間が長い
- ・ 未就園である

図表2-10 に平日における幼児のスクリーンタイムに関連する要因を示した。スクリーンタイムと関連がみられた要因として、個人レベルでは性別が、個人間レベルでは両親の労働時間が、組織レベルでは就園状況があげられた。一方、地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

女子では、平日のスクリーンタイムが短い傾向がみられ、性別によるメディア利用時間の違いが示唆された。一方で、両親の労働時間が長い家庭では、幼児のスクリーンタイムが長いことが示され、保護者の就労環境が子どものスクリーン利用時間に影響を与えている可能性がある。

また、未就園の幼児では、平日のスクリーンタイムが長い傾向が認められた。

【図表2-10】 平日における幼児のスクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さおよび影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

2-6) 休日におけるスクリーンタイムに関連する要因

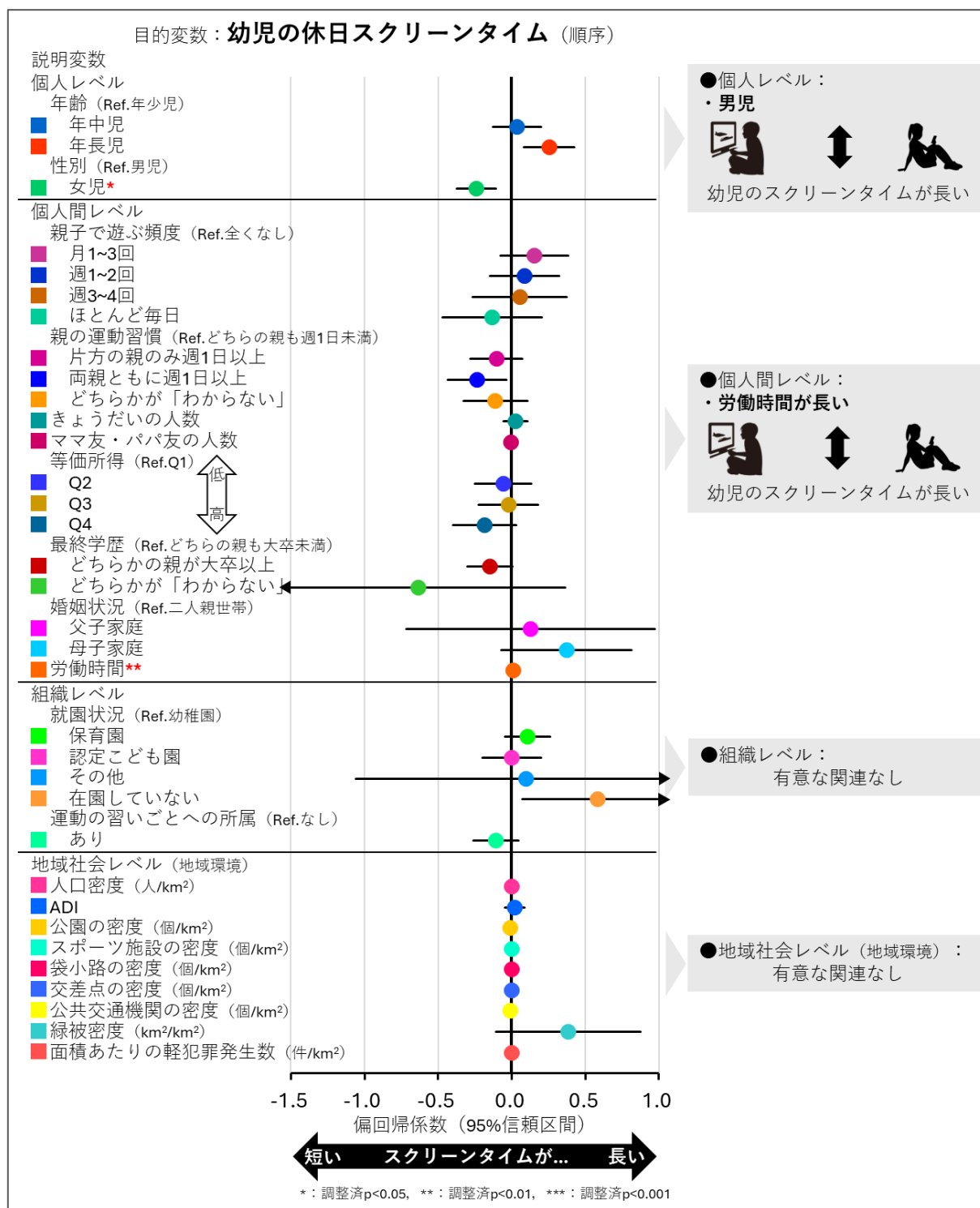
【ポイント】

- 幼児の休日のスクリーンタイムが短いことと関連がみられた要因
 - ・ 女子である
- 幼児の休日のスクリーンタイムが長いことと関連がみられた要因
 - ・ 両親の労働時間が長い

図表2-11に休日における幼児のスクリーンタイムに関連する要因を示した。スクリーンタイムと関連がみられた要因として、個人レベルでは性別が、個人間レベルでは両親の労働時間があげられた。一方、組織レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

女子では、休日のスクリーンタイムが短い傾向がみられ、性別によるメディア利用時間の違いが示唆された。一方で、両親の労働時間が長い家庭では、幼児の休日のスクリーンタイムが長い傾向が示された。

【図表2-11】 休日における幼児のスクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さに及ぼす影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

(3) 郊外(人口密度4,000人/km²未満)での解析

3-1) 郊外在住の幼児の総運動時間に関連する要因

【ポイント】

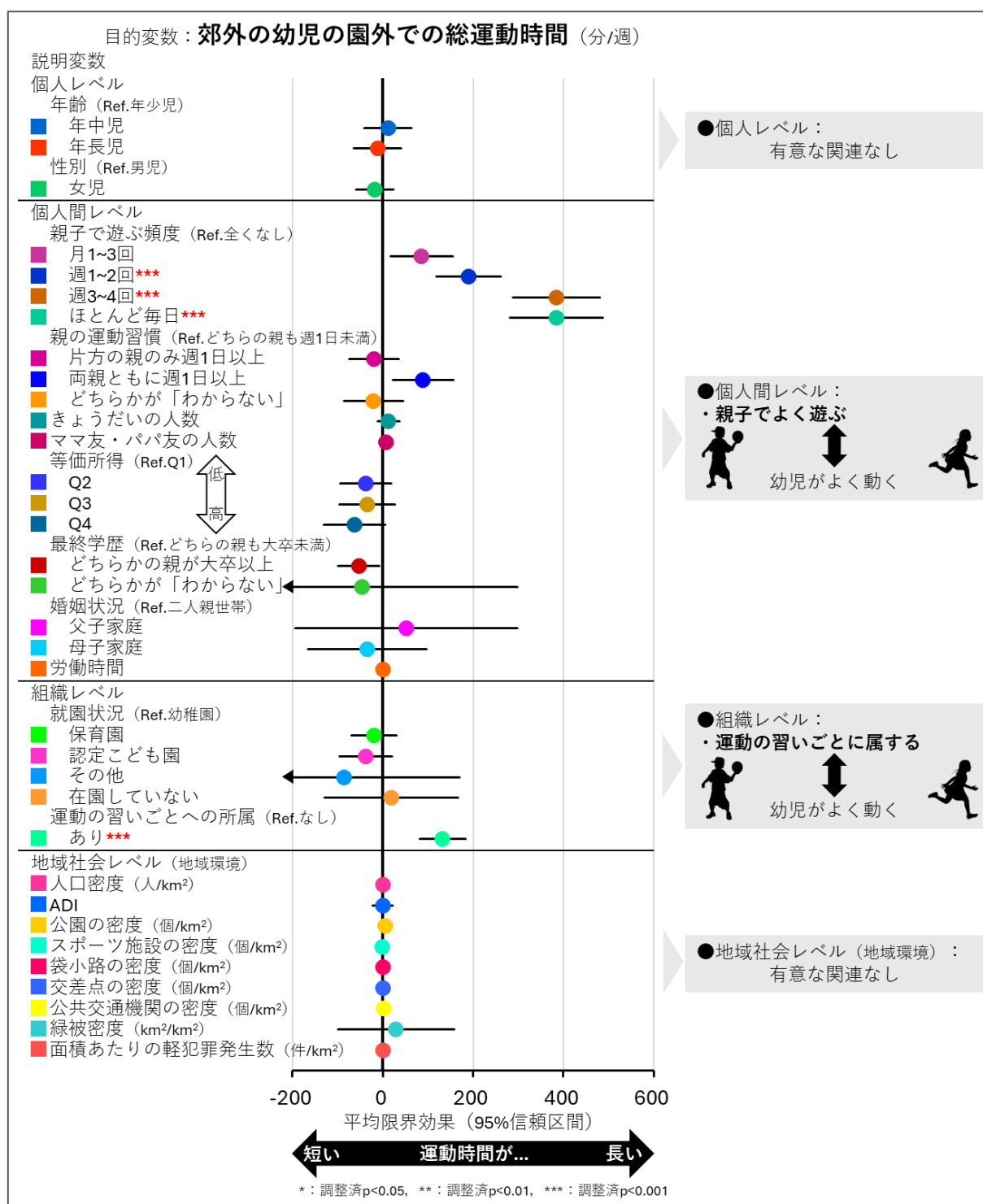
●郊外に在住する幼児の総運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

図表2-12に郊外在住の幼児における園外の総運動時間に関連する要因を示した。総運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、郊外在住の幼児の総運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが、幼児の運動機会の創出に寄与している可能性が示唆された。また、運動・スポーツの習いごとに参加している幼児では、総運動時間が長いことが示され、組織的な活動が郊外における幼児の運動機会の確保に寄与している可能性がある。

【図表2-12】 郊外在住の幼児における園外の総運動時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

3-2) 郊外在住の幼児の園外での運動場面ごとにみる関連要因 (外遊び、室内・屋内での運動遊び、運動・スポーツの習いごと)

①郊外在住の幼児の外遊び時間に関連する要因

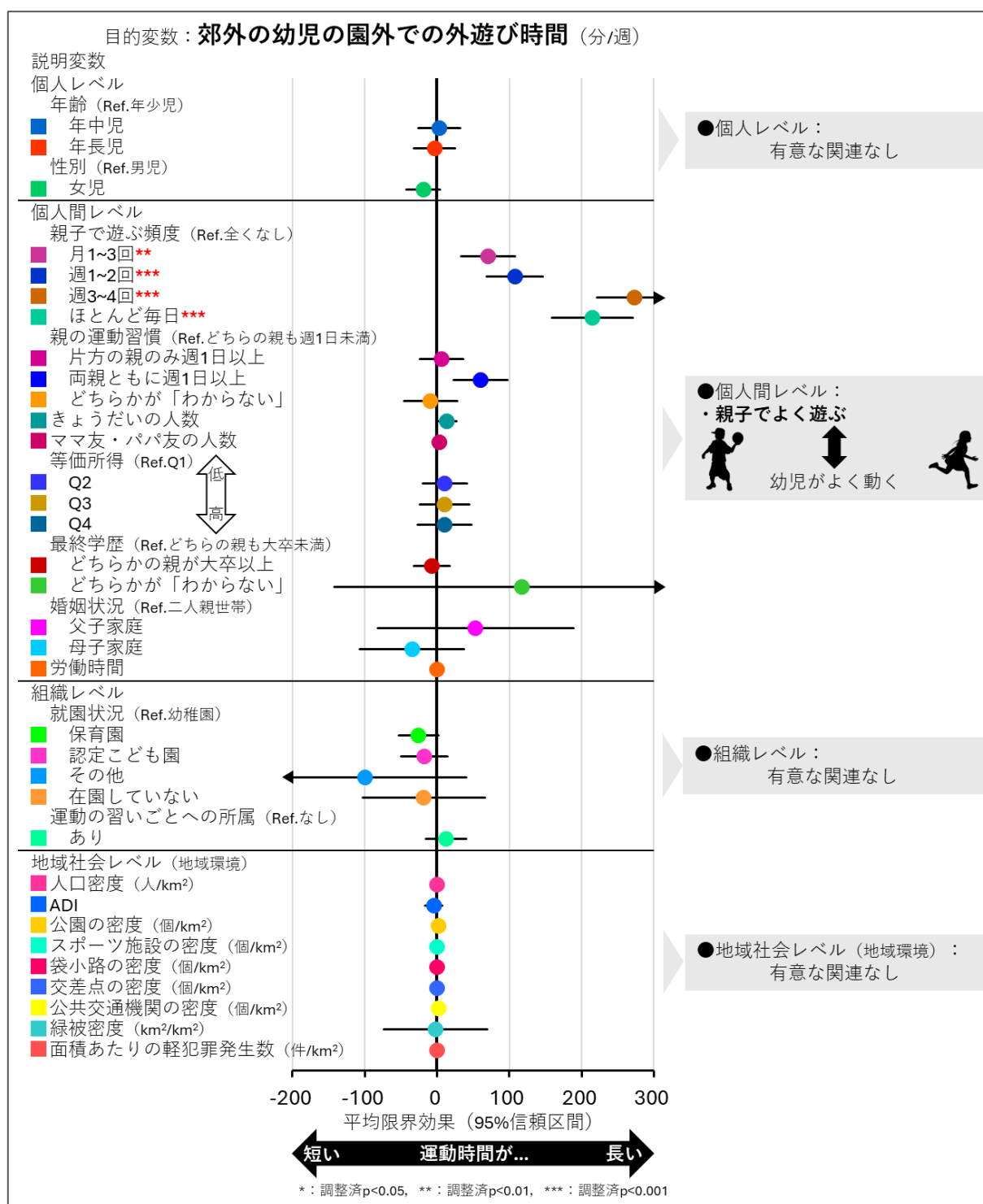
【ポイント】

- 郊外に在住する幼児の外遊び時間が長いことと関連がみられた要因
 - ・親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い

図表2-13に郊外在住の幼児における園外の外遊び時間に関連する要因を示した。外遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、郊外在住の幼児の外遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが、幼児の外遊び機会の創出に寄与している可能性が示唆された。

【図表2-13】 郊外在住の幼児における園外の外遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

②郊外在住の幼児の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因

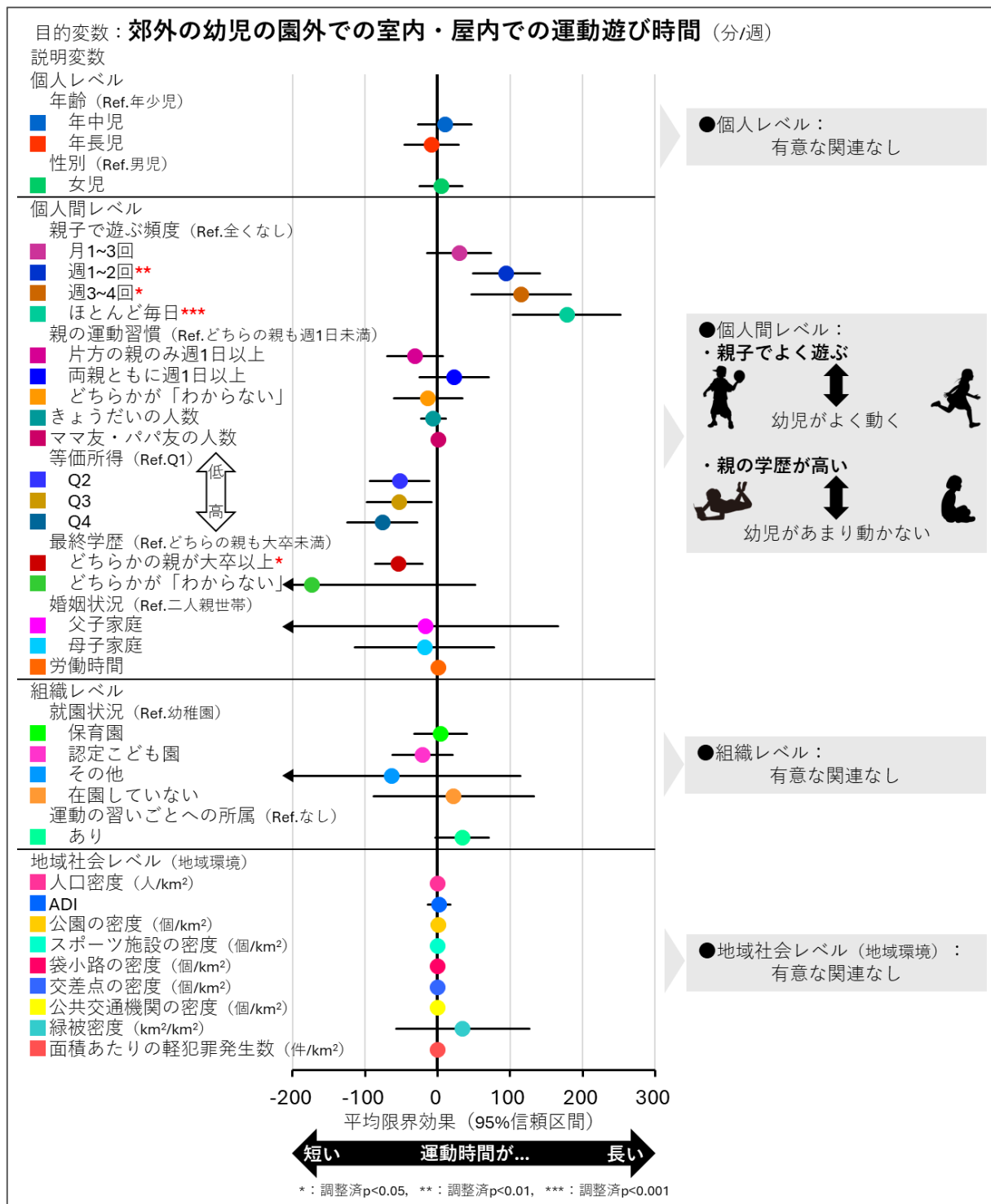
【ポイント】

- 郊外に在住する幼児の室内・屋内での運動遊び時間が長いことと関連がみられた要因
 - ・親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- 郊外に在住する幼児の室内・屋内での運動遊び時間が短いことと関連がみられた要因
 - ・親の最終学歴が高い

図表2-14に郊外在住の幼児における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因を示した。室内・屋内での運動遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や親の最終学歴があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、郊外在住の幼児の室内・屋内での運動遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが、幼児の室内や屋内での運動機会の創出に寄与している可能性が示唆された。また、親の最終学歴が高い家庭では、幼児の室内・屋内での運動遊び時間が短い傾向が認められた。

【図表2-14】 郊外在住の幼児における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

③郊外在住の幼児における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因

【ポイント】

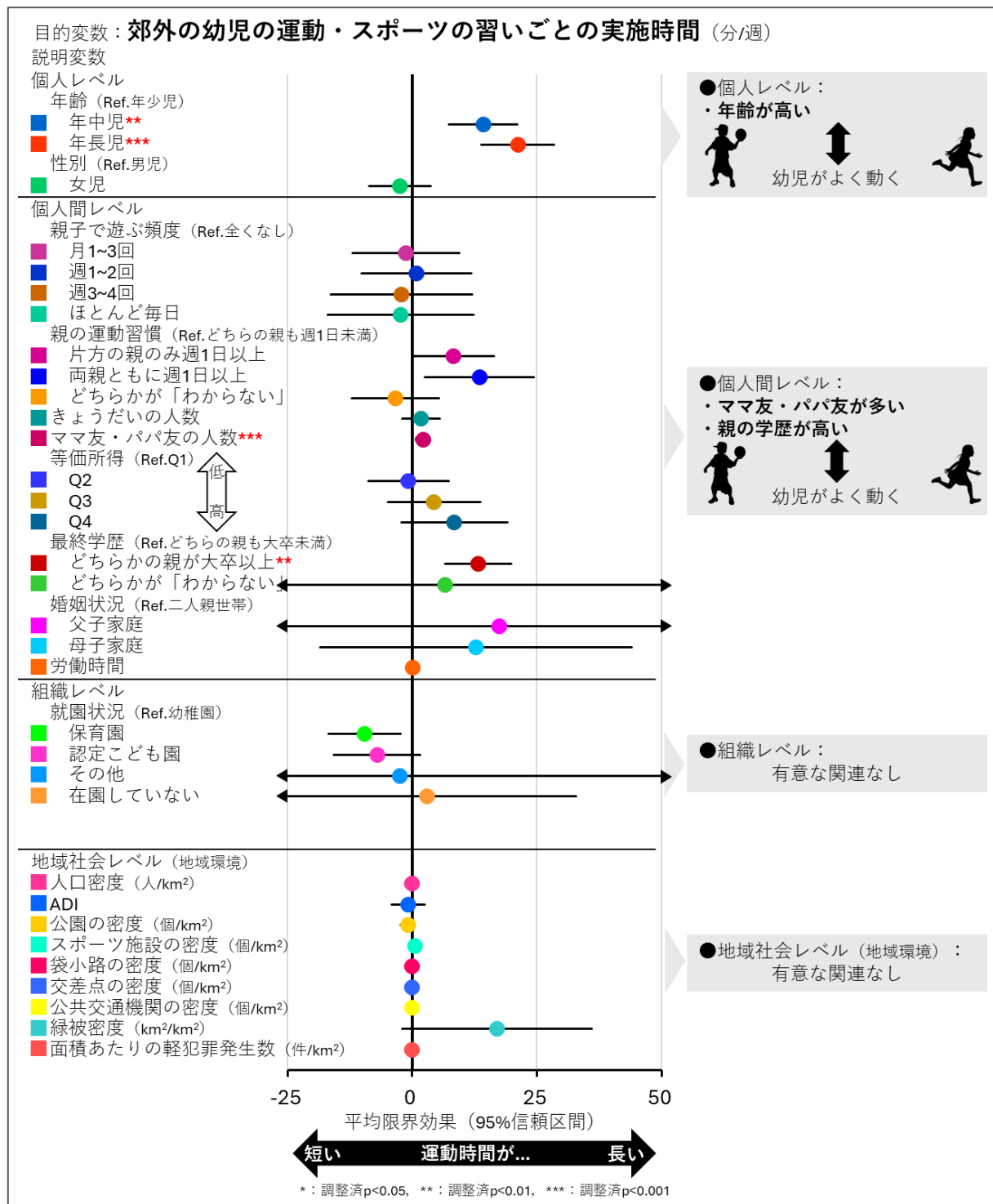
●郊外に在住する幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 幼児の年齢が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 親の最終学歴が高い

図表2-15に郊外在住の幼児における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因を示した。運動・スポーツの習いごとの実施時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは幼児の年齢が、個人間レベルでは保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)や親の最終学歴があげられた。一方、組織レベルおよび地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、幼児の年齢が高いほど、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向がみられ、成長とともに運動機会が増える可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが幼児のスポーツ活動の機会に影響を及ぼしている可能性がある。さらに、親の最終学歴が高い家庭でも、同様に運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向が示された。

【図表2-15】 郊外在住の幼児における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

3-3) 郊外在住の幼児における平日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

● 郊外に在住する幼児の平日の運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

● 郊外に在住する幼児の平日の運動時間が短いことと関連がみられた要因

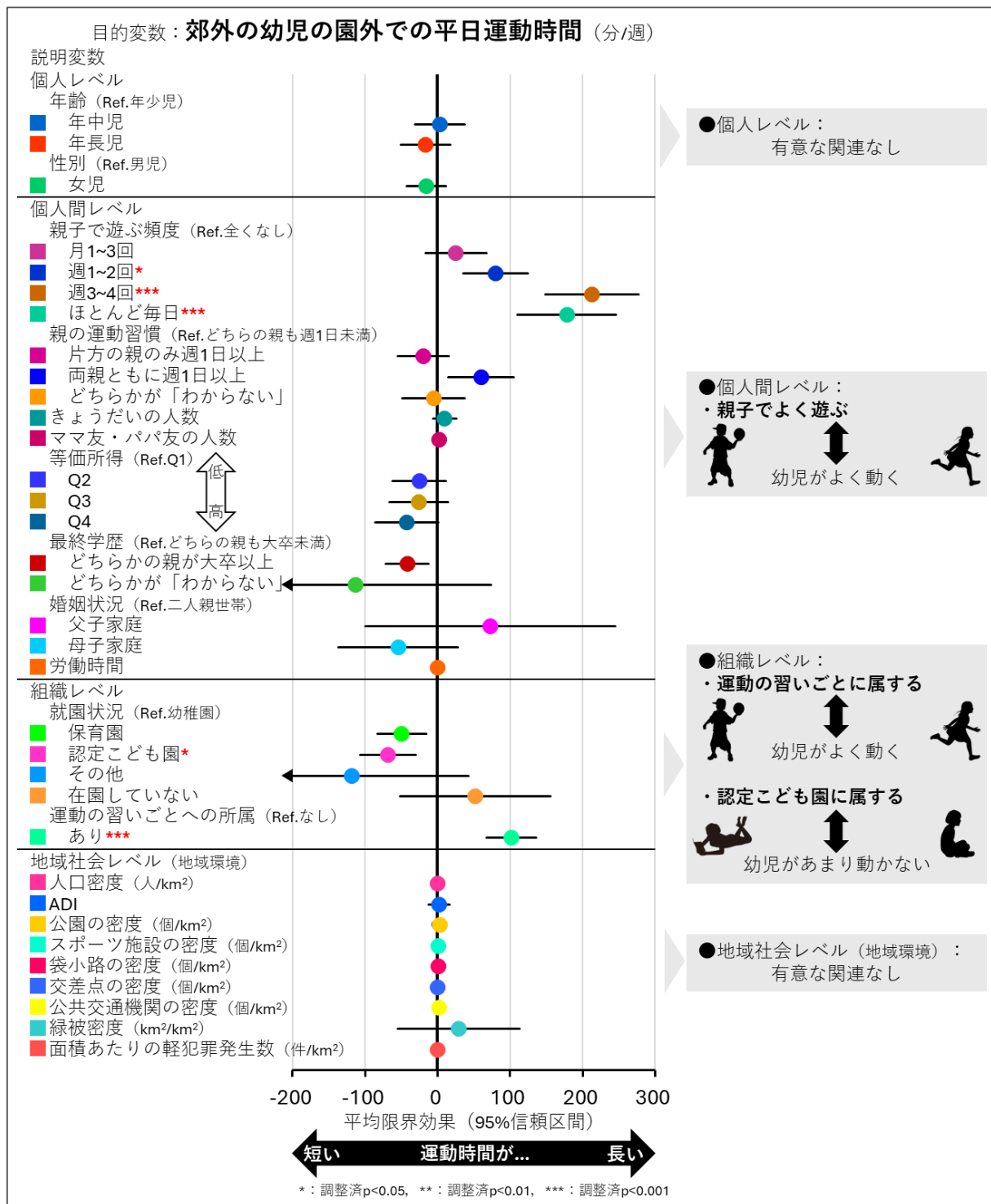
- ・ 認定こども園に通っている

図表2-16に郊外在住の幼児における園外の平日運動時間に関連する要因を示した。平日の運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルおよび地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、郊外在住の幼児の平日の運動時間が長い傾向が認められ、家庭内での親子の関わりが日常の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、運動・スポーツの習いごとに参加している幼児では、平日の運動時間が長いことが示され、組織的な活動が平日の運動機会の確保に寄与している可能性がある。

一方で、認定こども園に通っている幼児では、平日の運動時間が短い傾向が認められた。

【図表2-16】 郊外在住の幼児における園外の運動時間に関連する要因(平日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

3-4) 郊外在住の幼児における休日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

● 郊外に在住する幼児の休日の運動時間が長いことと関連がみられた要因

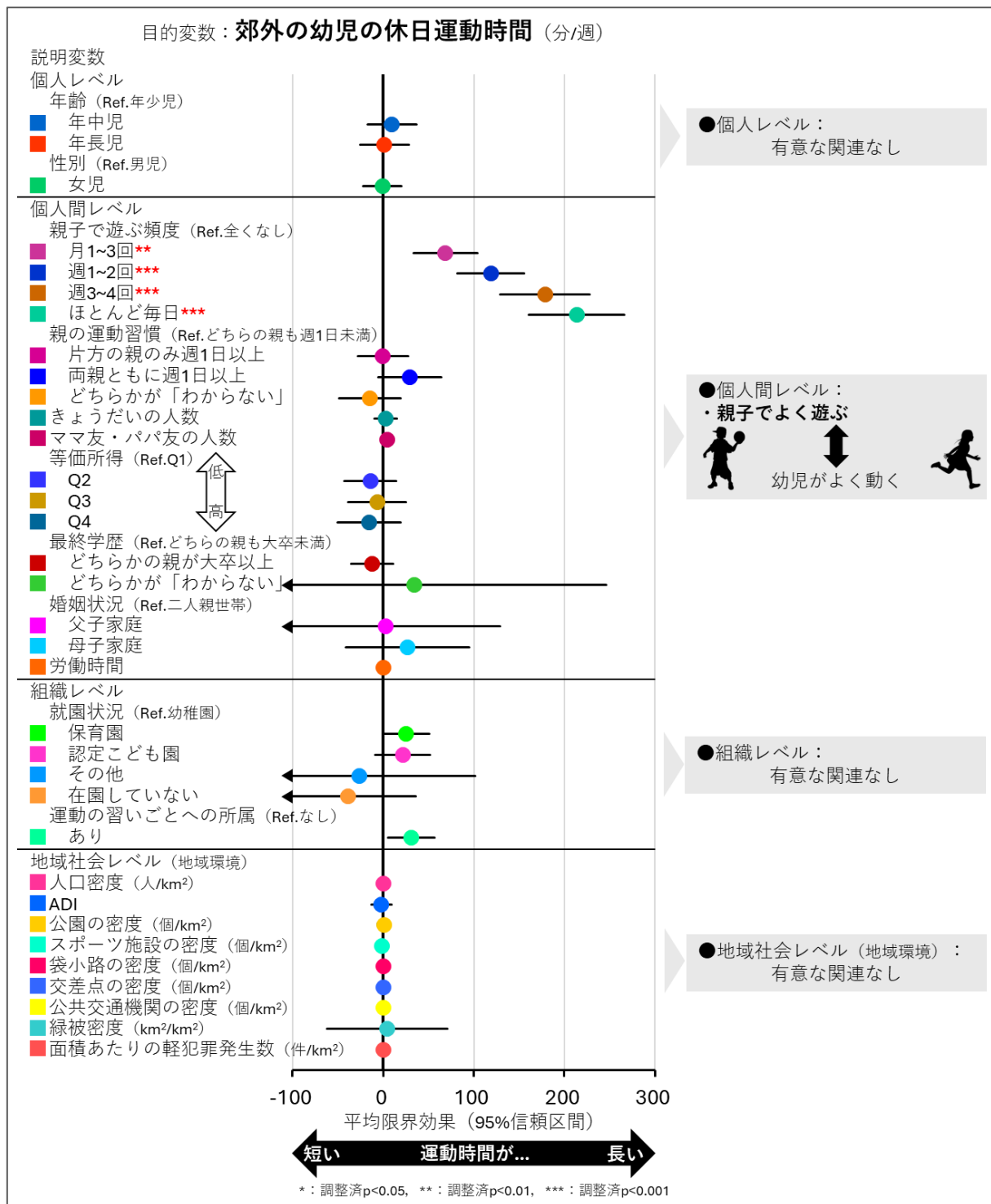
- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い

図表2-17 に郊外在住の幼児における休日運動時間に関連する要因を示した。休日の運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、郊外在住の幼児の休日の運動時間が長い傾向が認められた。

このことから、家庭内における親子の関わりが、休日における幼児の運動機会の創出に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

【図表2-17】 郊外在住の幼児の運動時間に関連する要因(休日)



注)AME(平均的限界効果)：ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差)：推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間)：統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス)：基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標)：地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

3-5) 郊外在住の幼児の平日スクリーンタイムに関連する要因

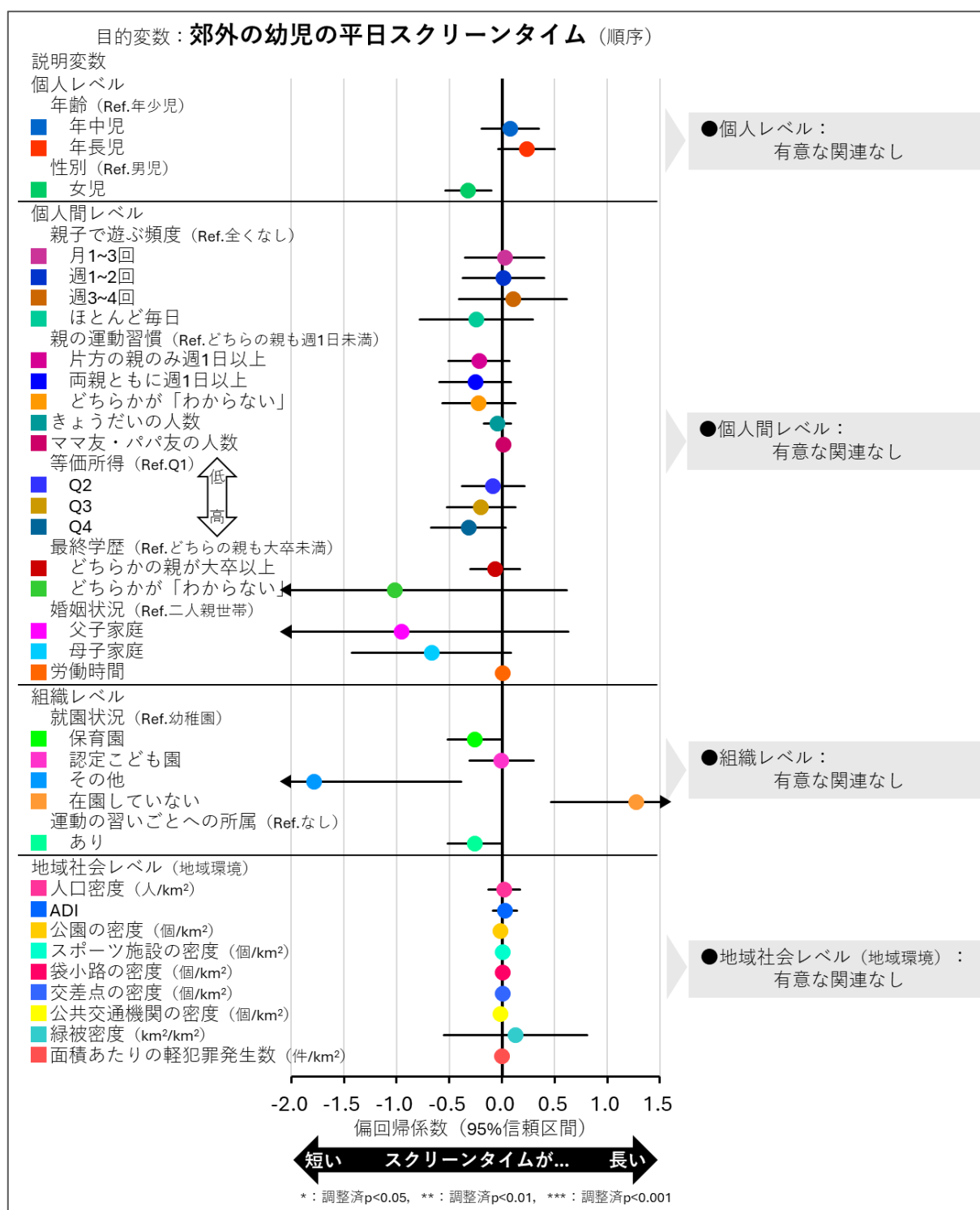
【ポイント】

- ・ 郊外に在住する幼児の平日スクリーンタイムは、特定の要因と有意な関連がみられなかった

図表2-18 に郊外在住の幼児の平日スクリーンタイムに関連する要因を示した。郊外における平日スクリーンタイムと関連する要因を検討したが、特定の個人、家庭、または環境要因との間に有意な関連は確認されなかった。これは、郊外においてスクリーンタイムの長さが特定の要因に依存するのではなく、各家庭の生活リズムや個別の状況によって左右される可能性を示唆している。

そのため、スクリーンタイムの管理や削減を目的とする場合、特定の要因に着目するのではなく、家庭ごとのライフスタイルや子どもの興味・関心に応じた多様なアプローチが求められる。例えば、スクリーンを使用しない遊びの選択肢を増やすことや、保護者が日常的に子どもの活動に関与したりするなど、家庭内においてスクリーンタイムの適切なコントロールが可能となるような環境づくりが有効と考えられる。

【図表2-18】 郊外在住の幼児の平日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さに及ぼす影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

3-6) 郊外在住の幼児の休日スクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

- ・ 郊外に在住する幼児の休日スクリーンタイムは、特定の要因と有意な関連がみられなかった

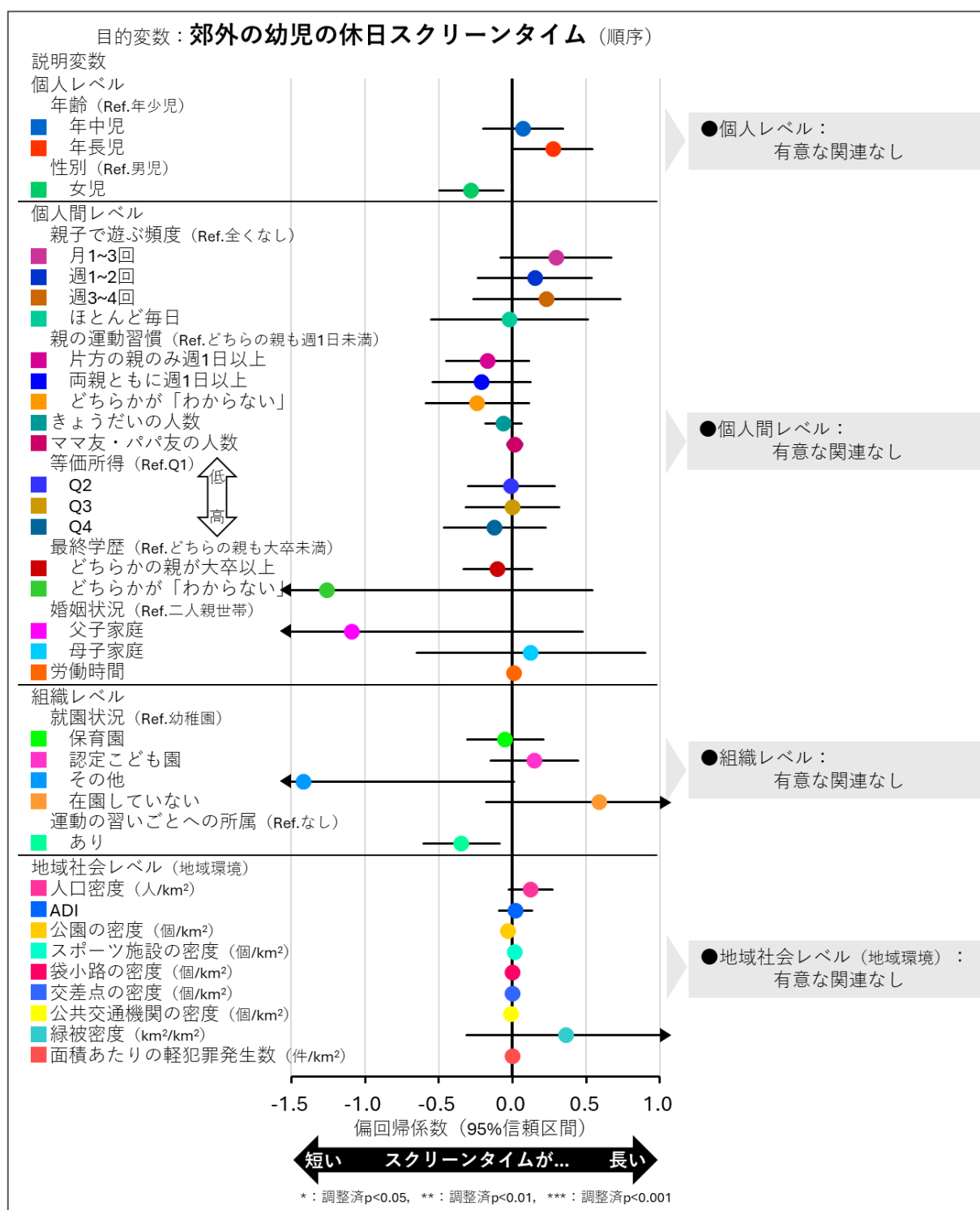
図表2-19に郊外在住の幼児の休日スクリーンタイムに関連する要因を示した。郊外における休日スクリーンタイムと関連する要因を検討したが、特定の個人、家庭、または環境要因との間に有意な関連は確認されなかった。この結果は、平日の場合と同様に、休日のスクリーンタイムが特定の要因に左右されるというよりも、家庭ごとの生活習慣や子どもの自由時間の過ごし方に左右される可能性を示唆している。

休日は平日と比べて、家族との過ごし方や外出の有無など、より多様な要因が関連していると考えられる。そのため、スクリーンタイムを適切に管理するためには、一律の対策ではなく、各家庭のライフスタイルに応じた柔軟なアプローチが必要となる。

例えば、親子で楽しめるプログラムを増やす、地域のイベントやスポーツ活動への参加を促進するなど、スクリーン以外の過ごし方の選択肢を広げる環境整備が効果的である。

今後は、家庭内でのメディア利用に関する保護者の意識や、地域の遊び場の利用状況などについても把握を進め、スクリーンタイムの削減に向けた具体的な環境整備および支援策を検討していくことが求められる。

【図表2-19】 郊外在住の幼児の休日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さに及ぼす影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

(4) 都市部(人口密度4,000人/km²以上)での解析

4-1) 都市部在住の幼児の総運動時間に関連する要因

【ポイント】

●都市部に在住する幼児の総運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

図表2-20に都市部在住の幼児における園外の総運動時間に関連する要因を示した。総運動時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、都市部在住の幼児の総運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが幼児の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、総運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが子どもの運動機会の創出に影響を与えている可能性がある。さらに、運動・スポーツの習いごとに参加している幼児は、そうでない幼児に比べて総運動時間が長い傾向があり、組織的な活動が都市部における幼児の運動機会の確保に貢献している可能性が示唆された。

【図表2-20】 都市部在住の幼児における園外の総運動時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

4-2) 都市部在住の幼児の園外での運動場面ごとにみる関連要因 (外遊び、室内・屋内での運動遊び、運動・スポーツの習いごと)

①都市部在住の幼児の外遊び時間に関連する要因

【ポイント】

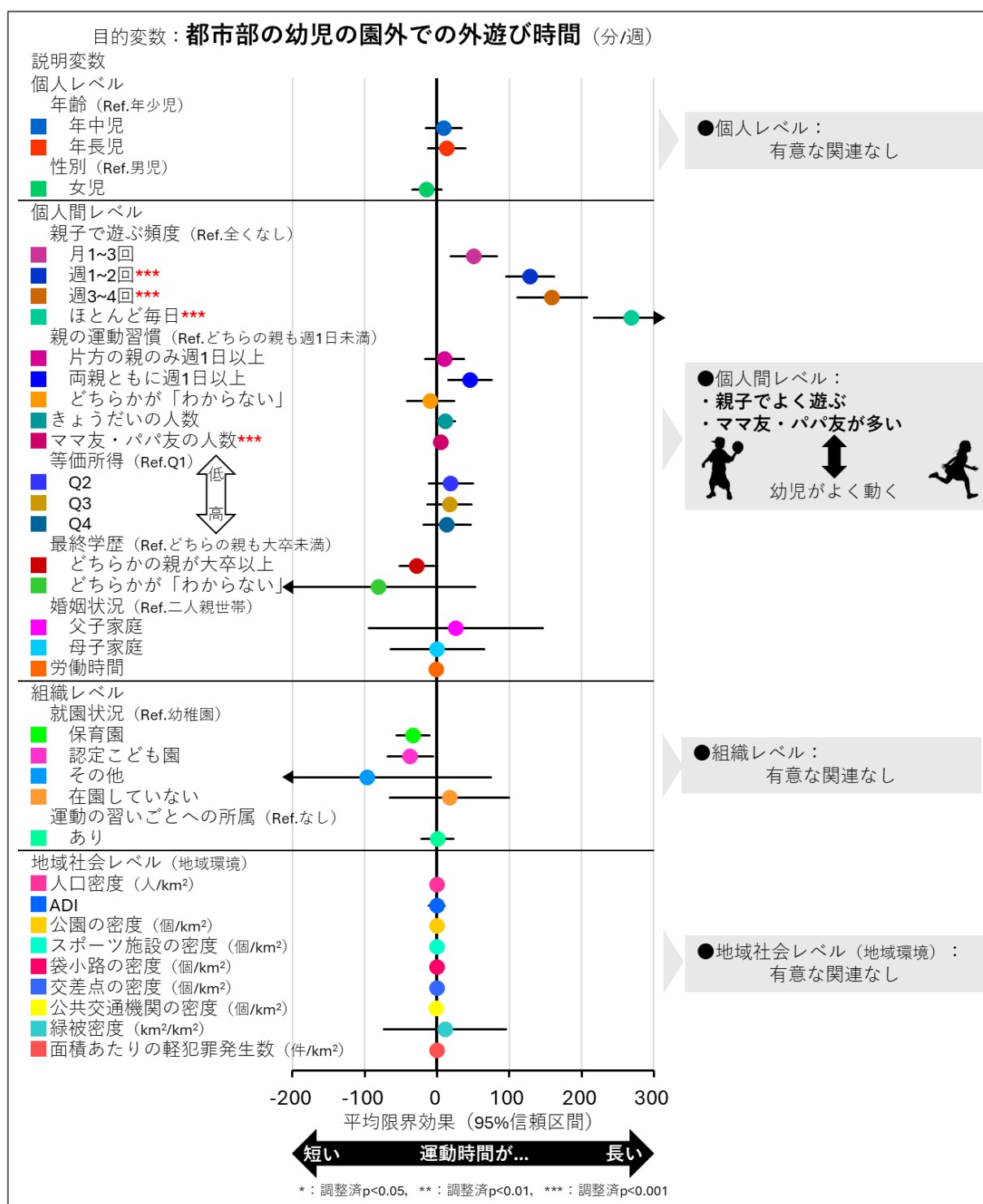
●都市部に在住する幼児の外遊び時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

図表2-21に都市部在住の幼児における園外の外遊び時間に関連する要因を示した。外遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、都市部在住の幼児の外遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが幼児の外遊び機会の増加に寄与している可能性がある。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭においても、幼児の外遊び時間が長い傾向がみられ、保護者が積極的に子どもと外で遊ぶ時間を確保することや、保護者同士のつながりを通じて外遊びの機会が増える可能性を示唆している。

【図表2-21】 都市部在住の幼児における園外の外遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

②都市部在住の幼児の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因

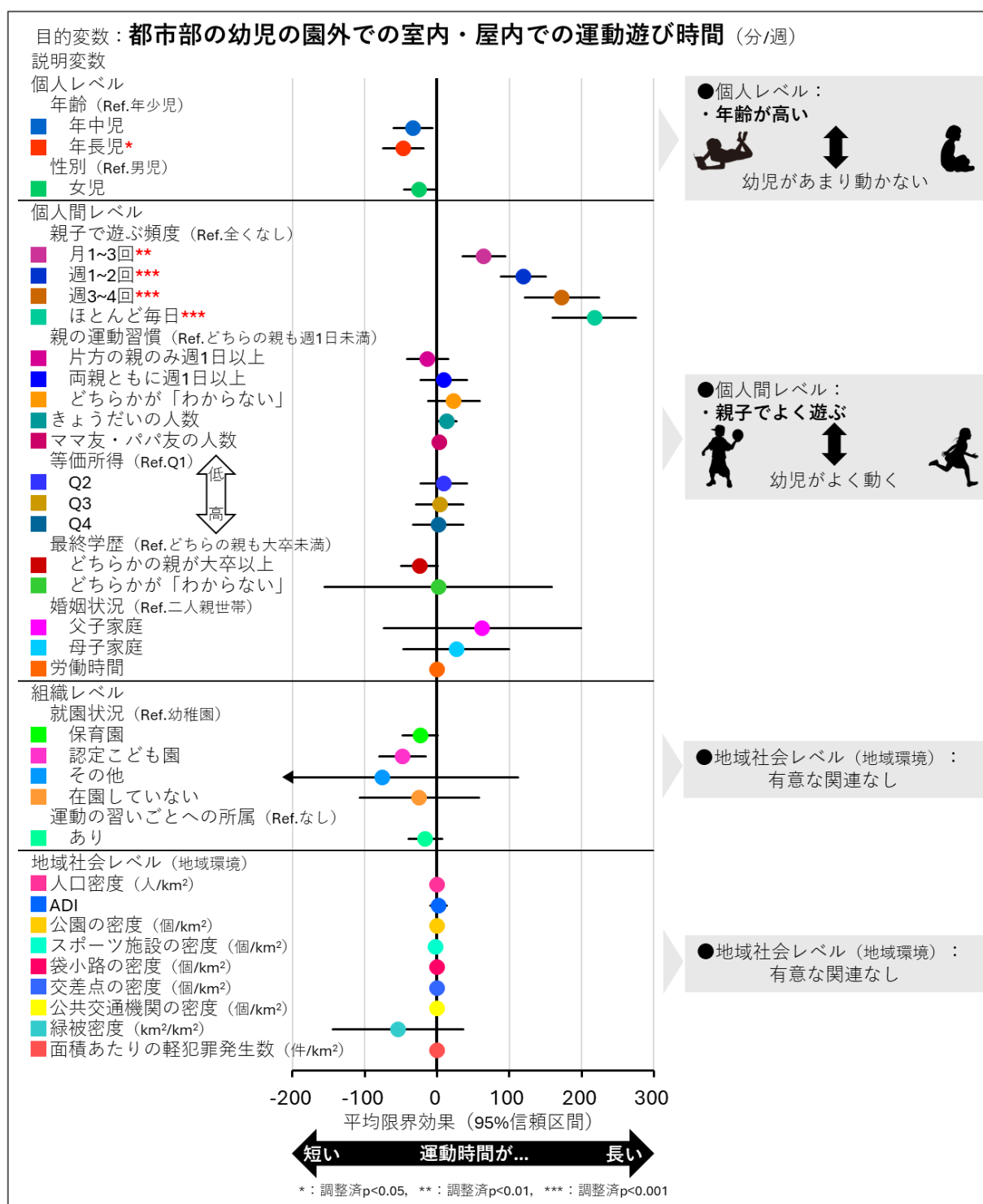
【ポイント】

- 都市部に在住する幼児の室内・屋内での運動遊び時間が長いことと関連がみられた要因
 - ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- 都市部に在住する幼児の室内・屋内での運動遊び時間が短いことと関連がみられた要因
 - ・ 幼児の年齢が高い

図表2-22に都市部在住の幼児における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因を示した。室内・屋内での運動遊び時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは幼児の年齢が、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度があげられた。一方、組織レベルおよび地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、都市部在住の幼児の室内・屋内での運動遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが幼児の室内や屋内での遊び時間の増加に寄与している可能性が示唆された。一方、幼児の年齢が高いほど、室内・屋内での運動遊び時間が短い傾向がみられ、成長とともに室内や屋内で過ごす時間が減少する可能性が示された。

【図表2-22】都市部在住の幼児における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

③都市部在住の幼児における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因

【ポイント】

●都市部に在住する幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 幼児の年齢が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 等価所得が高い

●都市部に在住する幼児の運動・スポーツの習いごとの実施時間が短いことと関連がみられた要因

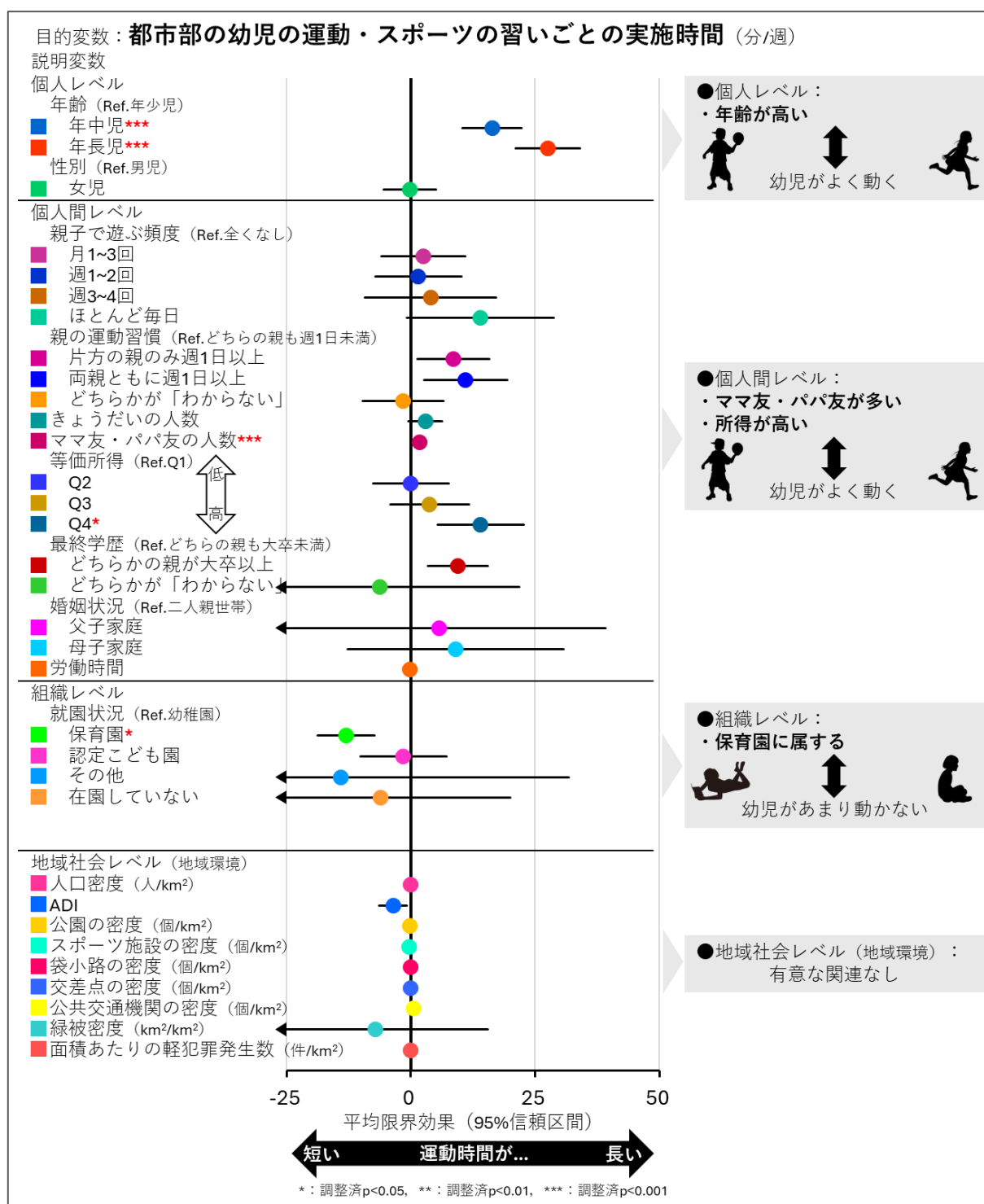
- ・ 保育園に就園している

図表2-23に都市部在住の幼児における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因を示した。運動・スポーツの習いごとの実施時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは幼児の年齢が、個人間レベルでは保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)や等価所得があげられた。一方、組織レベルでは保育園への就園が関連要因として確認されたが、地域社会レベル(近隣環境)においては有意な関連はみられなかった。

特に、幼児の年齢が高いほど、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向がみられ、成長とともに運動機会が増える可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが幼児のスポーツ活動の機会に影響を与えている可能性がある。さらに、等価所得が高い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが明らかとなり、経済的な要因が幼児のスポーツ活動に関与している可能性が示された。

一方で、保育園に就園している幼児では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が短い傾向が認められた。

【図表2-23】 都市部在住の幼児における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

4-3) 都市部在住の幼児における平日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

●都市部に在住する幼児の平日運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ きょうだいの人数が多い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

●都市部に在住する幼児の平日運動時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 保育園や認定こども園に就園している

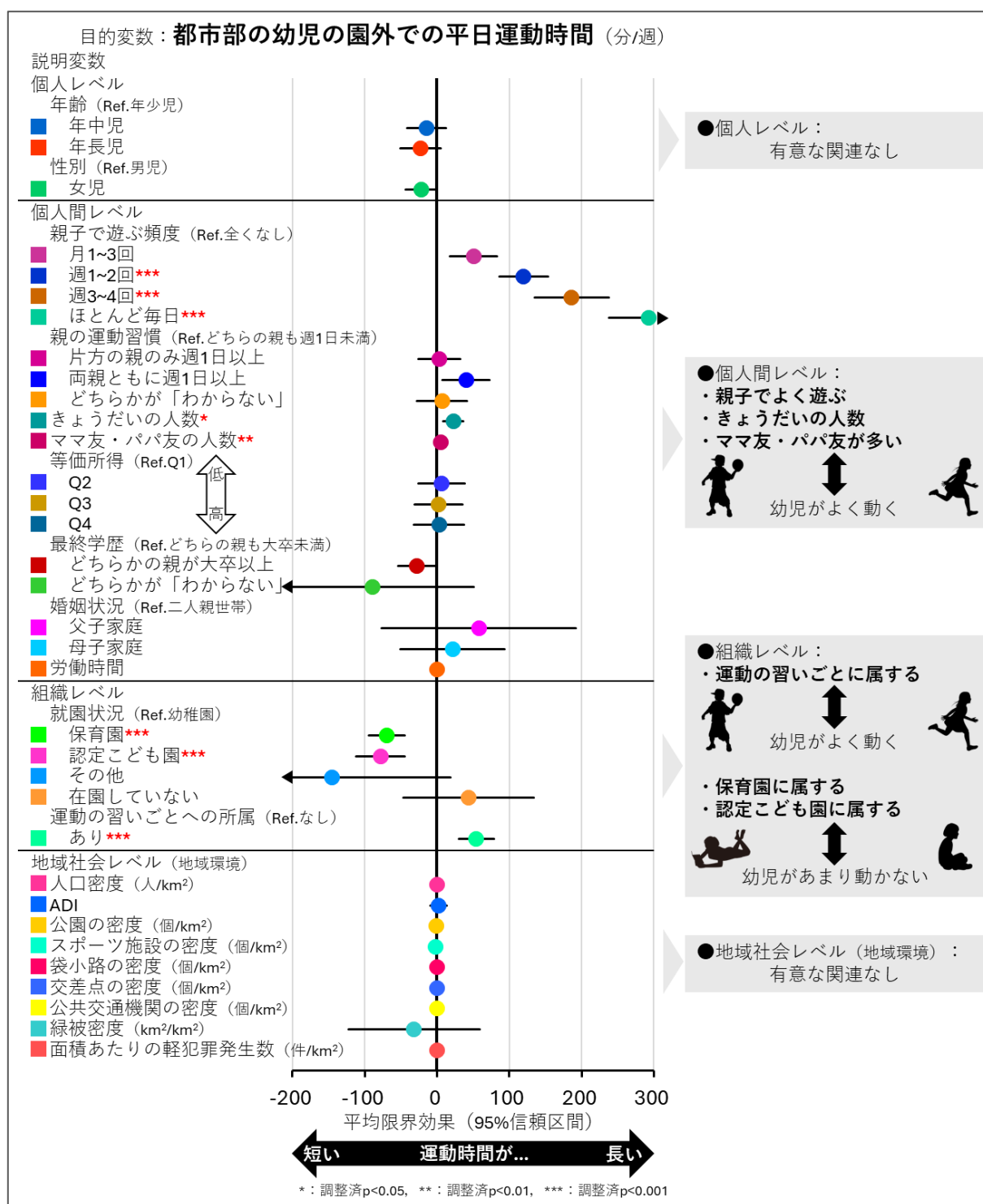
図表2-24に都市部在住の幼児における園外の平日運動時間に関連する要因を示した。平日の運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、きょうだいの人数、保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、都市部在住の幼児の平日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが日常の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、きょうだいの人数が多い家庭では、平日の運動時間が長いことが示され、きょうだい間での遊びが運動機会の増加に影響を与えている可能性がある。

さらに、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、平日の運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが子どもの運動機会を広げる要因となる可能性が示唆された。また、運動・スポーツの習いごとに参加している幼児では、平日の運動時間が長い傾向がみられ、組織的な運動活動が日常の運動機会の確保に貢献している可能性がある。

一方で、保育園や認定こども園に就園している幼児では、平日の運動時間が短い傾向が認められた。

【図表2-24】都市部在住の幼児における園外の運動時間に関連する要因(平日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

4-4) 都市部在住の幼児における休日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

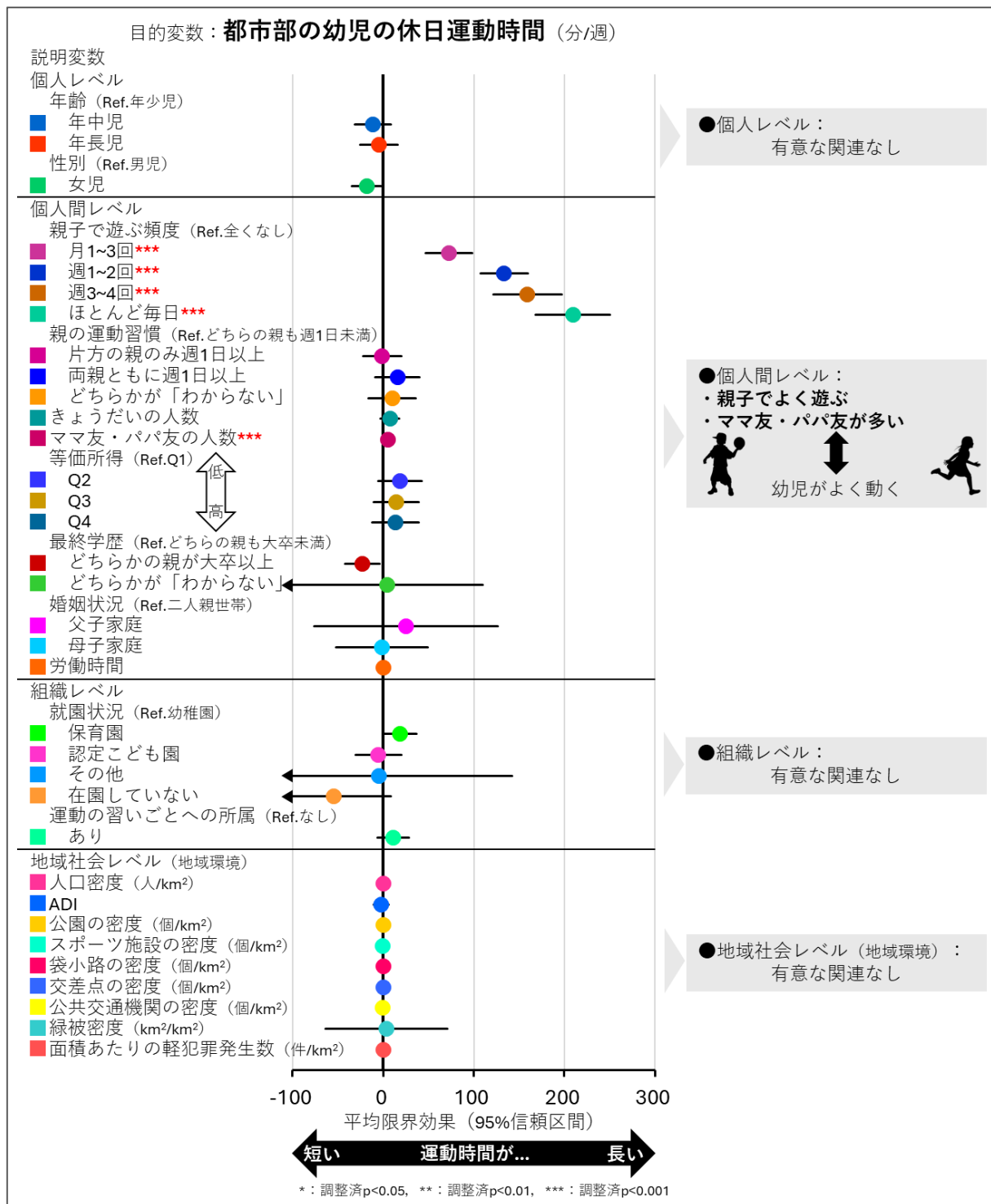
●都市部に在住する幼児の休日運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

図表2-25に都市部在住の幼児における休日運動時間に関連する要因を示した。休日の運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、都市部在住の幼児の休日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが休日の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、休日の運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが幼児の運動機会の創出に影響を与えている可能性がうかがえる。

【図表2-25】都市部在住の幼児の運動時間に関連する要因(休日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

4-5) 都市部在住の幼児における平日のスクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

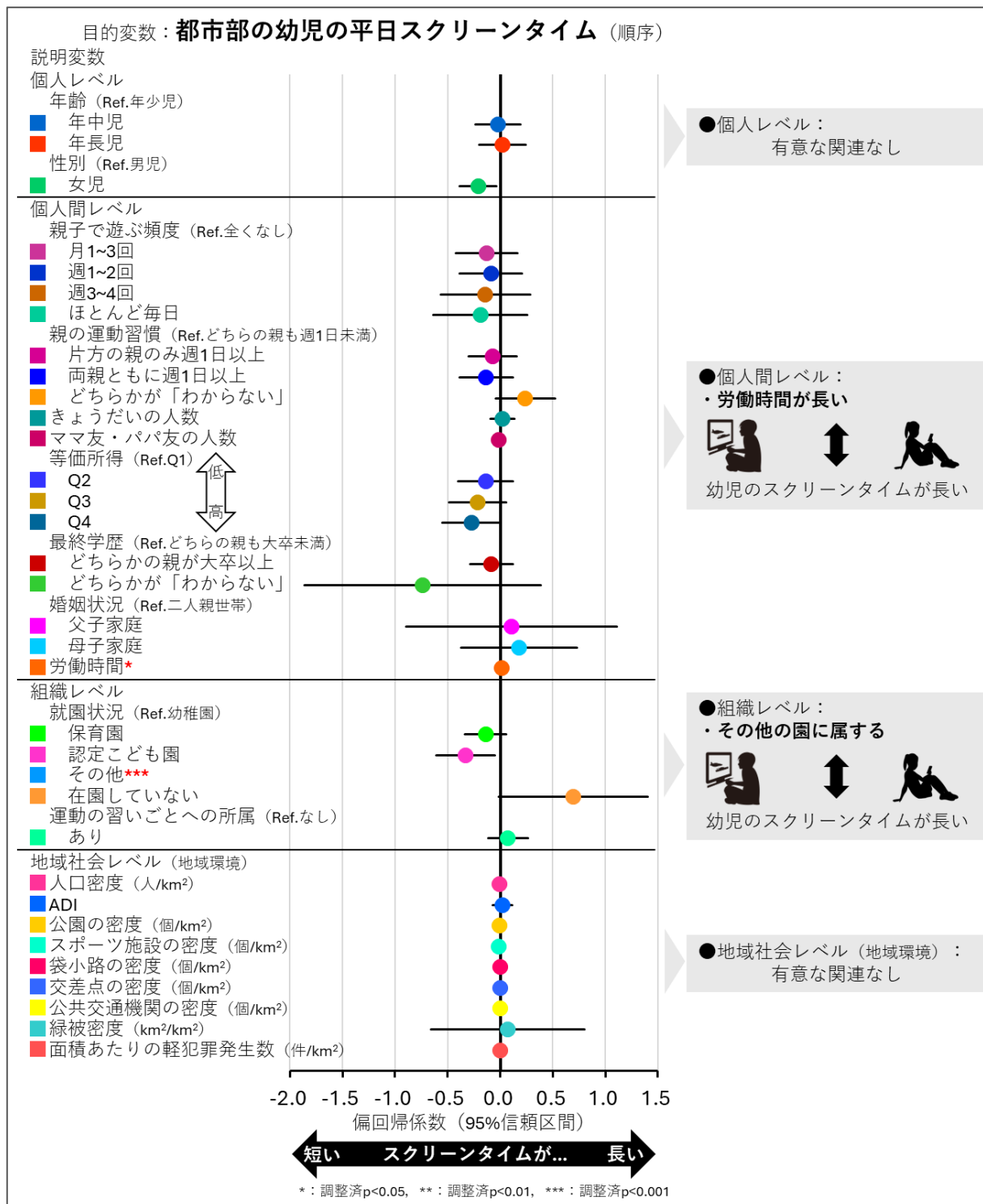
●都市部に在住する幼児の平日スクリーンタイムが長いことと関連がみられた要因

- ・ 両親の労働時間が長い
- ・ その他の園に就園している

図表2-26に都市部在住の幼児における平日のスクリーンタイムに関連する要因を示した。平日のスクリーンタイムと関連がみられた要因として、個人間レベルでは両親の労働時間が、組織レベルではその他の園への就園があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、両親の労働時間が長い家庭では、都市部在住の幼児の平日スクリーンタイムが長い傾向がみられ、保護者の就労環境が子どものスクリーン利用時間に影響を与えている可能性が示唆された。また、その他の園に就園している幼児では、スクリーンタイムが長いことが示された。

【図表2-26】 都市部在住の幼児の平日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さおよび短さに及ぼす影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

4-6) 都市部在住の幼児における休日のスクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

●都市部に在住する幼児の休日スクリーンタイムが長いことと関連がみられた要因

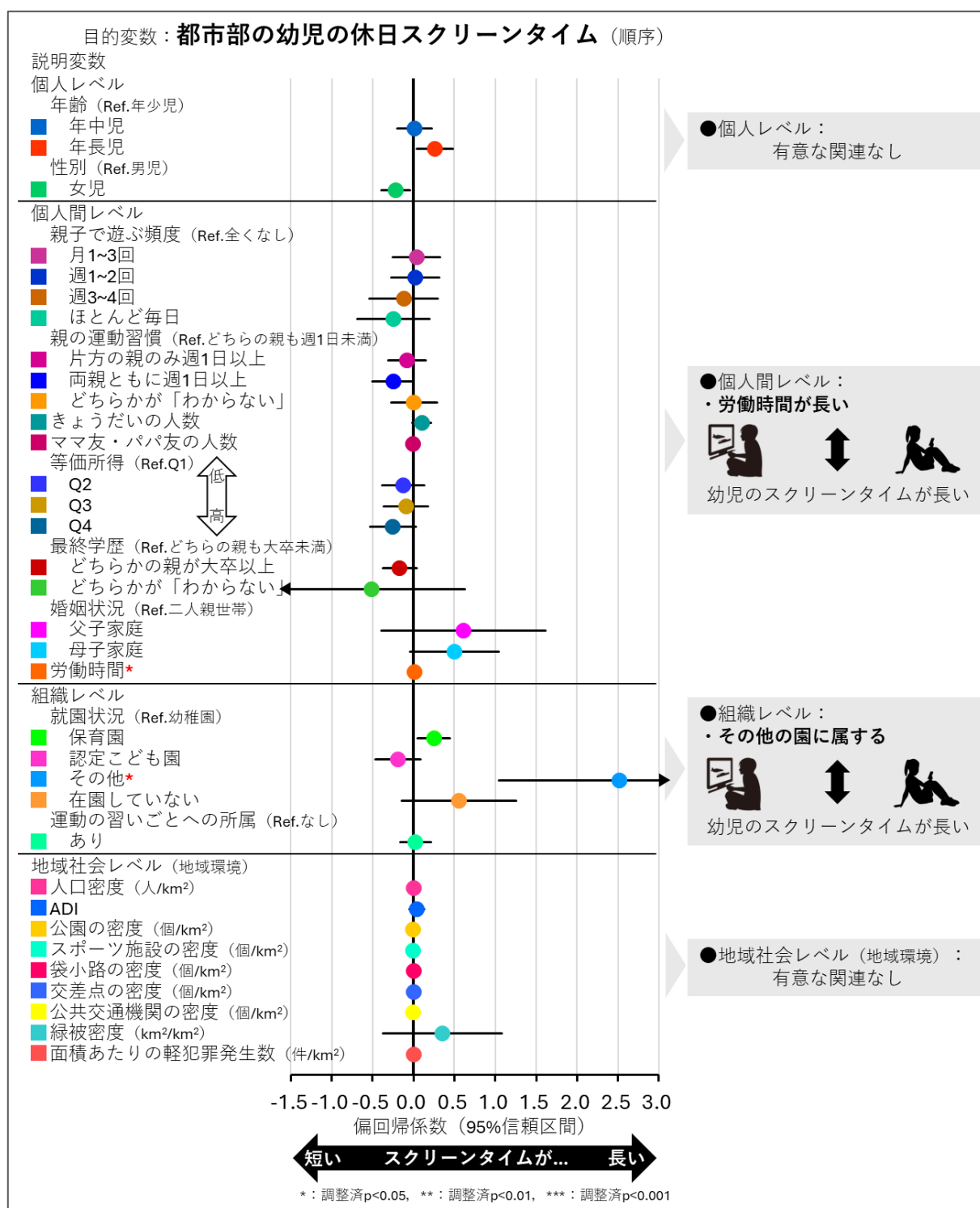
- ・ 両親の労働時間が長い
- ・ その他の園に就園している

図表2-27に都市部在住の幼児における休日のスクリーンタイムに関連する要因を示した。休日のスクリーンタイムと関連がみられた要因として、個人間レベルでは両親の労働時間が、組織レベルではその他の園への就園があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、両親の労働時間が長い家庭では、都市部在住の幼児の休日スクリーンタイムが長い傾向がみられ、保護者の就労環境が子どものスクリーン利用時間に影響を与えている可能性が示唆された。また、その他の園に就園している幼児では、スクリーンタイムが長いことが示された。

これらの結果を踏まえると、保護者の働き方に応じた育児サポートの提供や、家庭でのスクリーンタイム管理を支援する施策の強化が、幼児の健康的な生活リズムを促進するために重要である。

【図表2-27】 都市部在住の幼児の休日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さおよび影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

(5) 性別による解析

<男子>

5-1) 男子の総運動時間に関連する要因

【ポイント】

●男子の総運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ きょうだいの人数が多い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

●男子の総運動時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 認定こども園に就園している

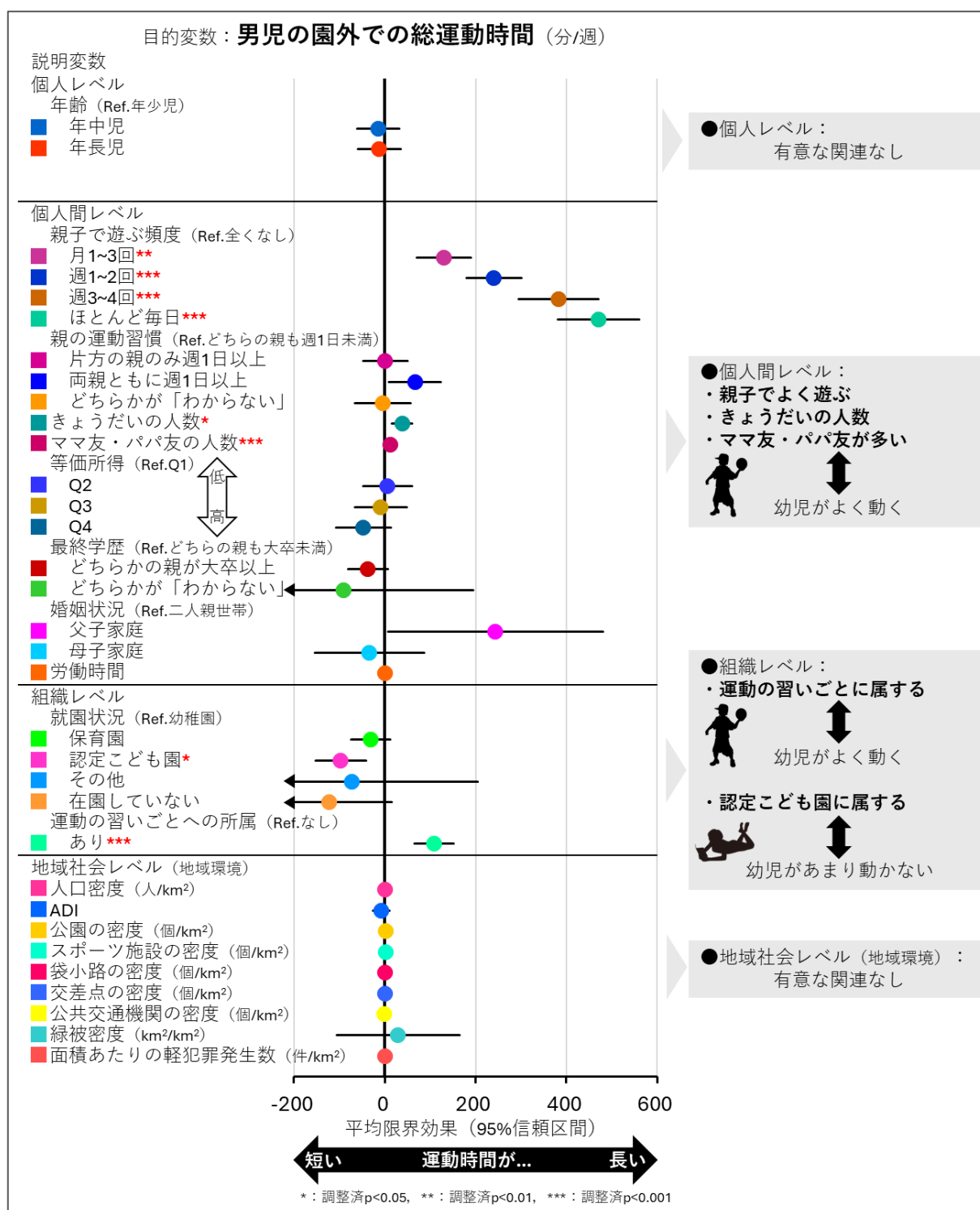
図表2-28に男子における園外の総運動時間に関連する要因を示した。総運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、きょうだいの人数、保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、男子の総運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが男子の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、きょうだいの人数が多い家庭では、男子の総運動時間が長いことが示され、きょうだい間での遊びが運動機会の増加に影響を与えている可能性がある。

さらに、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、男子の総運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが子どもの運動機会を創出する可能性が示唆された。また、運動・スポーツの習いごとに参加している男子では、総運動時間が長い傾向がみられ、組織的な運動活動が日常の運動機会の確保に貢献している可能性がある。

一方で、認定こども園に就園している男子では、総運動時間が短い傾向が認められた。

【図表2-28】男子における園外の総運動時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-2) 男子の園外での運動場面ごとにみる関連要因

(外遊び、室内・屋内での運動遊び、運動・スポーツの習いごと)

①男子の外遊び時間に関連する要因

【ポイント】

●男子の外遊び時間が長いことと関連がみられた要因

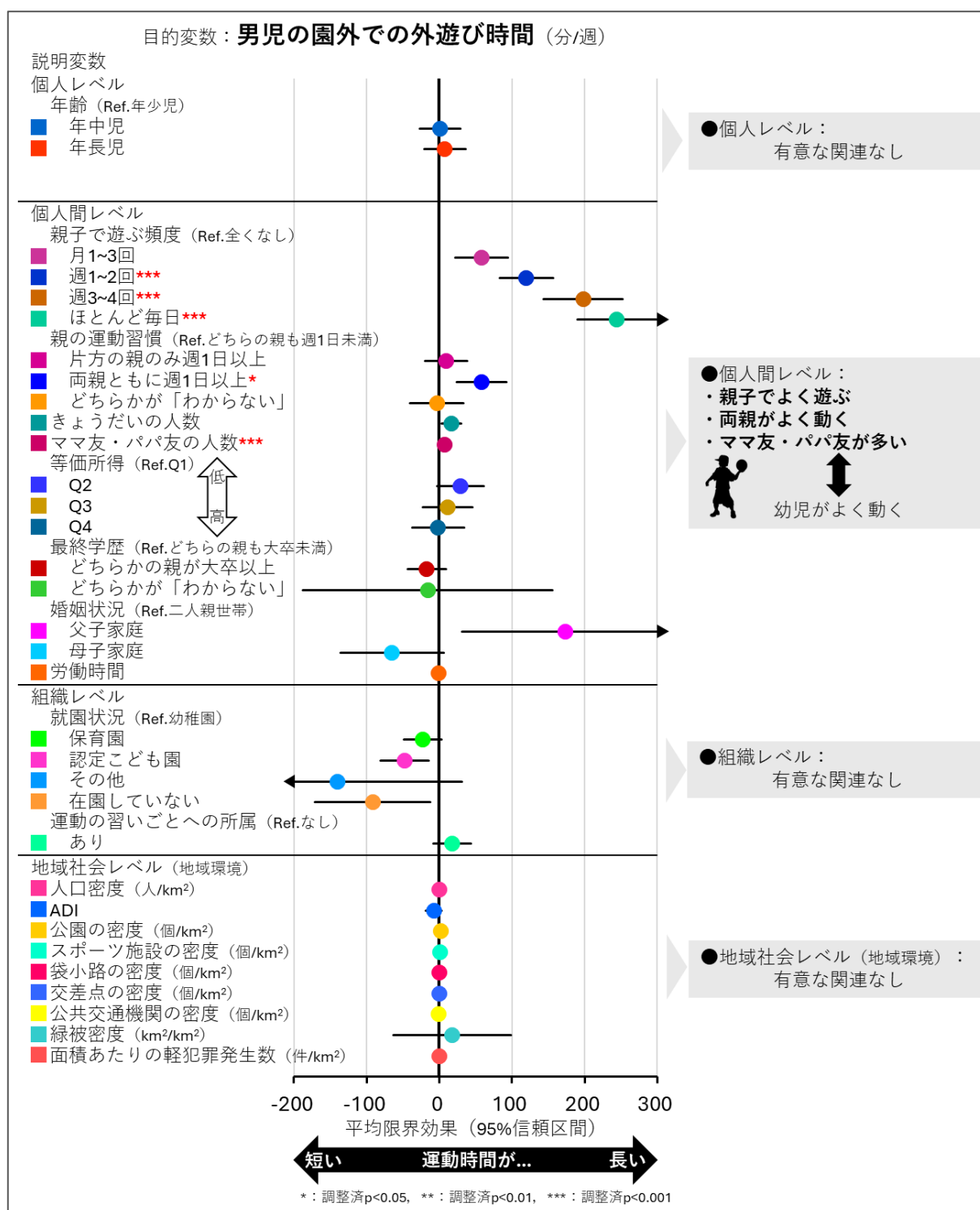
- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 両親が週1日以上運動をしている
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

図表2-29に男子における園外の外遊び時間に関連する要因を示した。外遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度、両親の運動習慣、保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、男子の外遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが男子の外遊び機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、両親が週1日以上運動をしている家庭では、男子の外遊び時間が長いことが示され、保護者の運動習慣が子どもの運動機会に影響を与えている可能性がある。

さらに、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、男子の外遊び時間が長い傾向がみられ、保護者同士のネットワークが男子の運動機会の創出に影響を与えている可能性が示唆された。

【図表2-29】男子における園外の外遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

②男子の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因

【ポイント】

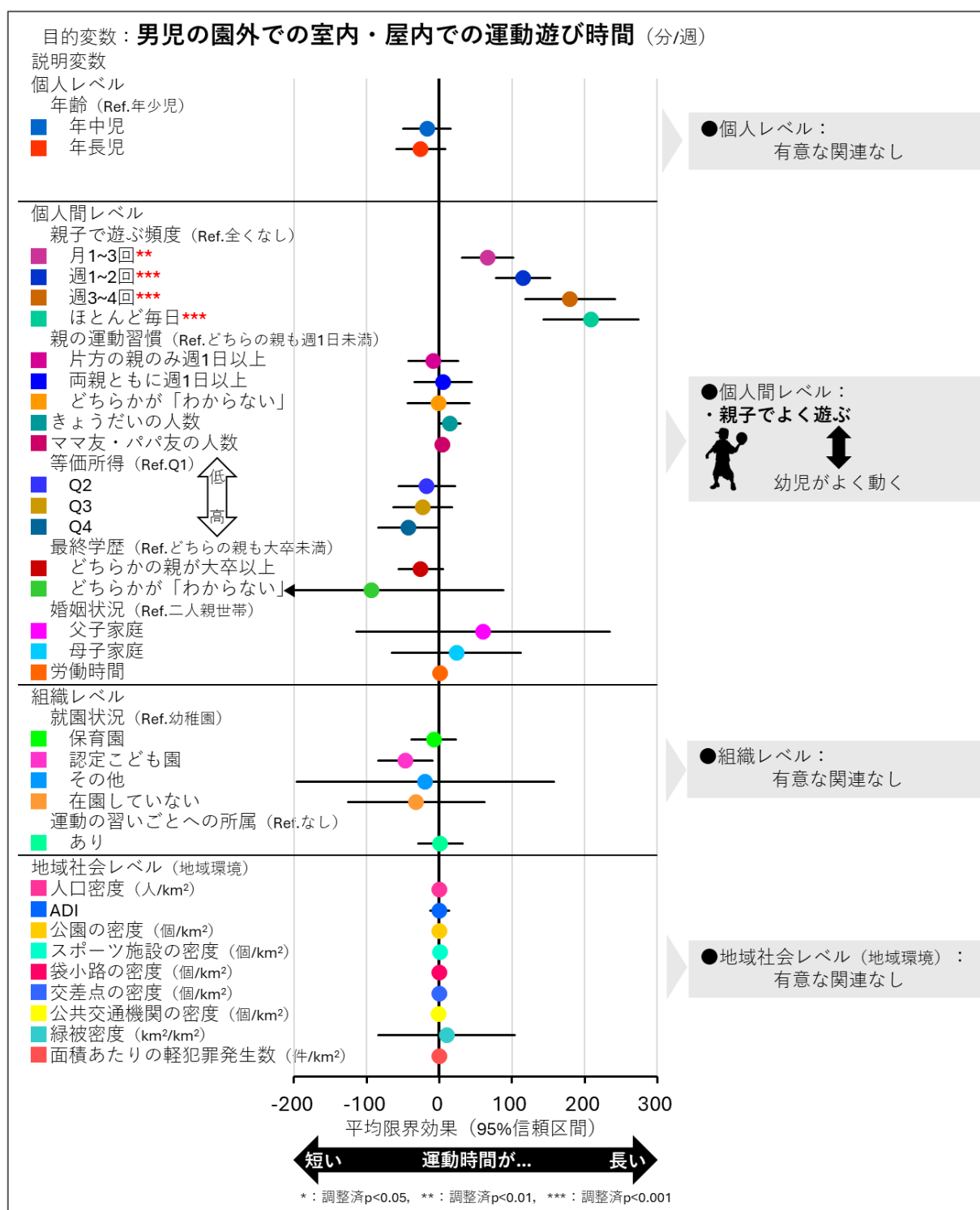
●男子の室内・屋内での運動遊び時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い

図表2－30に男子における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因を示した。室内・屋内での運動遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル（近隣環境）においては、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、男子の室内・屋内での運動遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが運動遊びの機会の増加に寄与していることが示唆された。

【図表2-30】 男子における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

③男子における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因

【ポイント】

●男子の運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 年齢が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 親の最終学歴が高い

●男子の運動・スポーツの習いごとの実施時間が短いことと関連がみられた要因

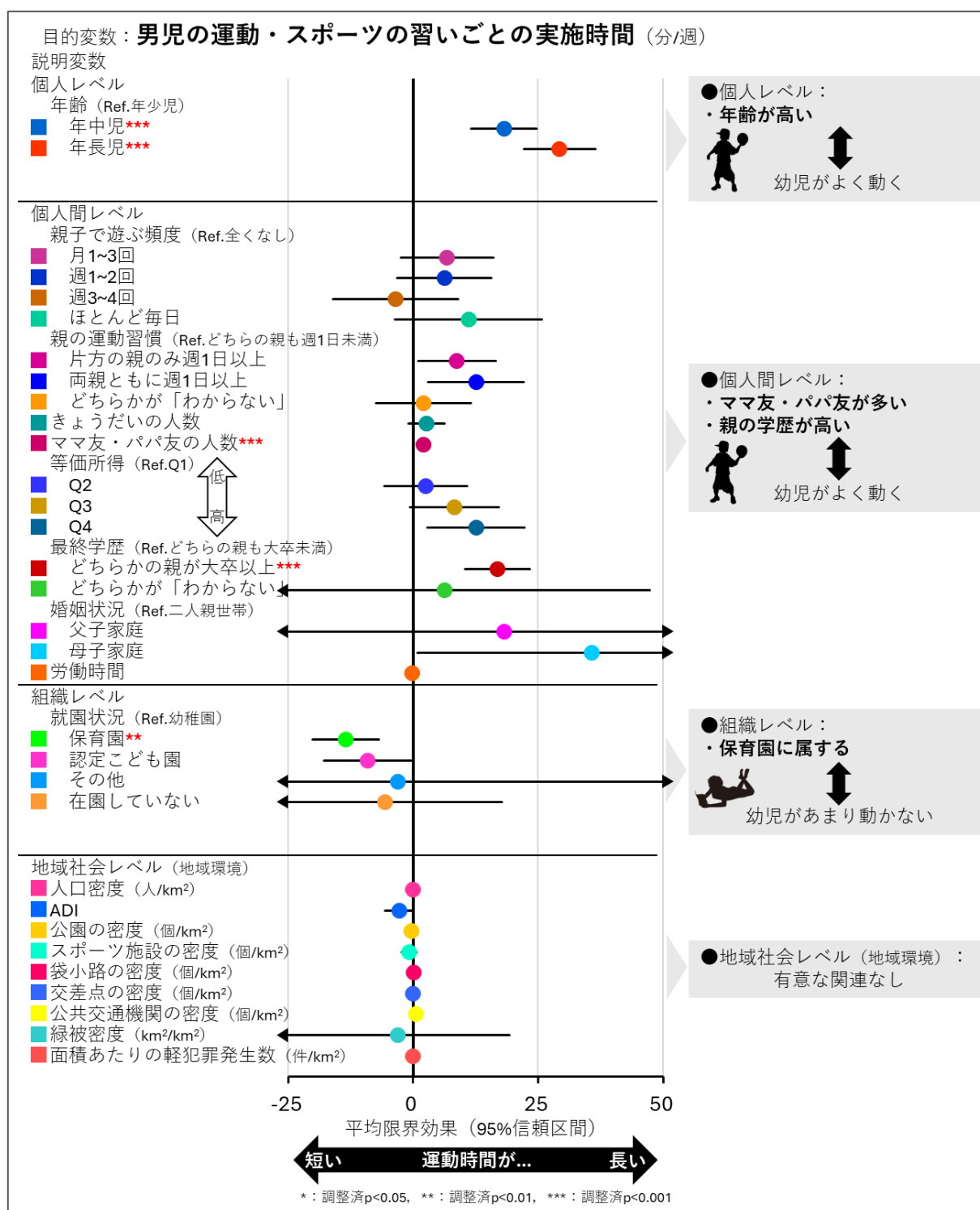
- ・ 保育園に通っている

図表2-31に男子における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因を示した。運動・スポーツの習いごとの実施時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは年齢が、個人間レベルでは保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)や親の最終学歴があげられた。一方、組織レベルでは保育園への通園が関連要因として確認されたが、地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連はみられなかった。

特に、年齢が高い男子ほど、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向がみられ、成長とともに運動機会が増える可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向が示され、保護者同士のネットワークが男子のスポーツ活動の機会に影響を与えている可能性がある。さらに、親の最終学歴が高い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが示された。

一方で、保育園に通っている男子では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が短い傾向がみられた。

【図表2-31】 男子における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-3) 男子の平日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

●男子の平日運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

●男子の平日運動時間が短いことと関連がみられた要因

- ・ 保育園や認定こども園に通っている

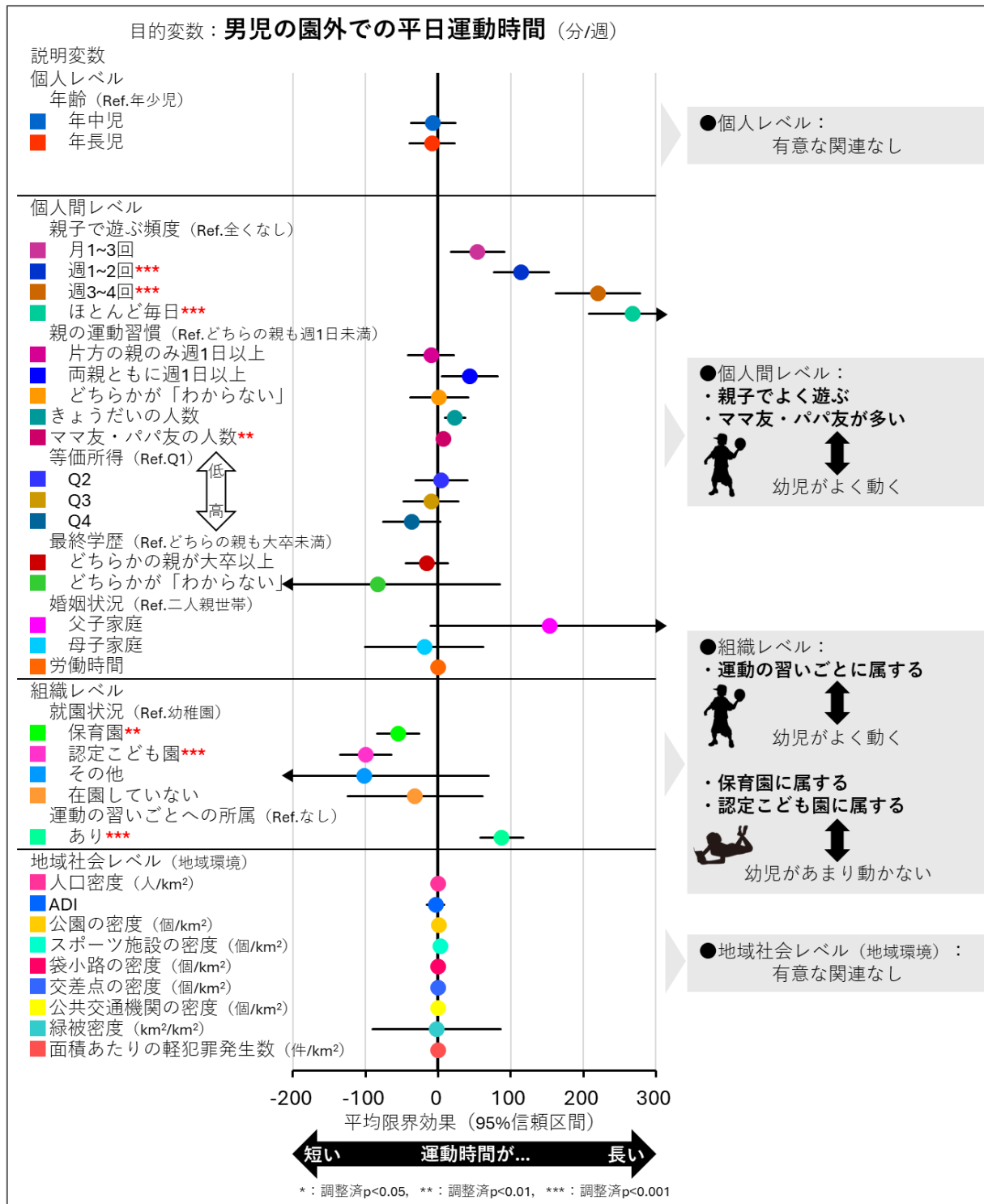
図表2-32に男子における園外での平日運動時間に関連する要因を示した。平日の運動時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、男子の平日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、男子の平日の運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが男子の運動機会を広げる要因となる可能性がある。

さらに、運動・スポーツの習いごとに参加している男子では、平日の運動時間が長い傾向がみられ、組織的な運動活動が平日の運動機会の確保に貢献している可能性が示唆された。

一方で、保育園や認定こども園に通っている男子では、平日の運動時間が短い傾向がみられた。

【図表2-32】 男子における園外での運動時間に関連する要因(平日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-4) 男子の休日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

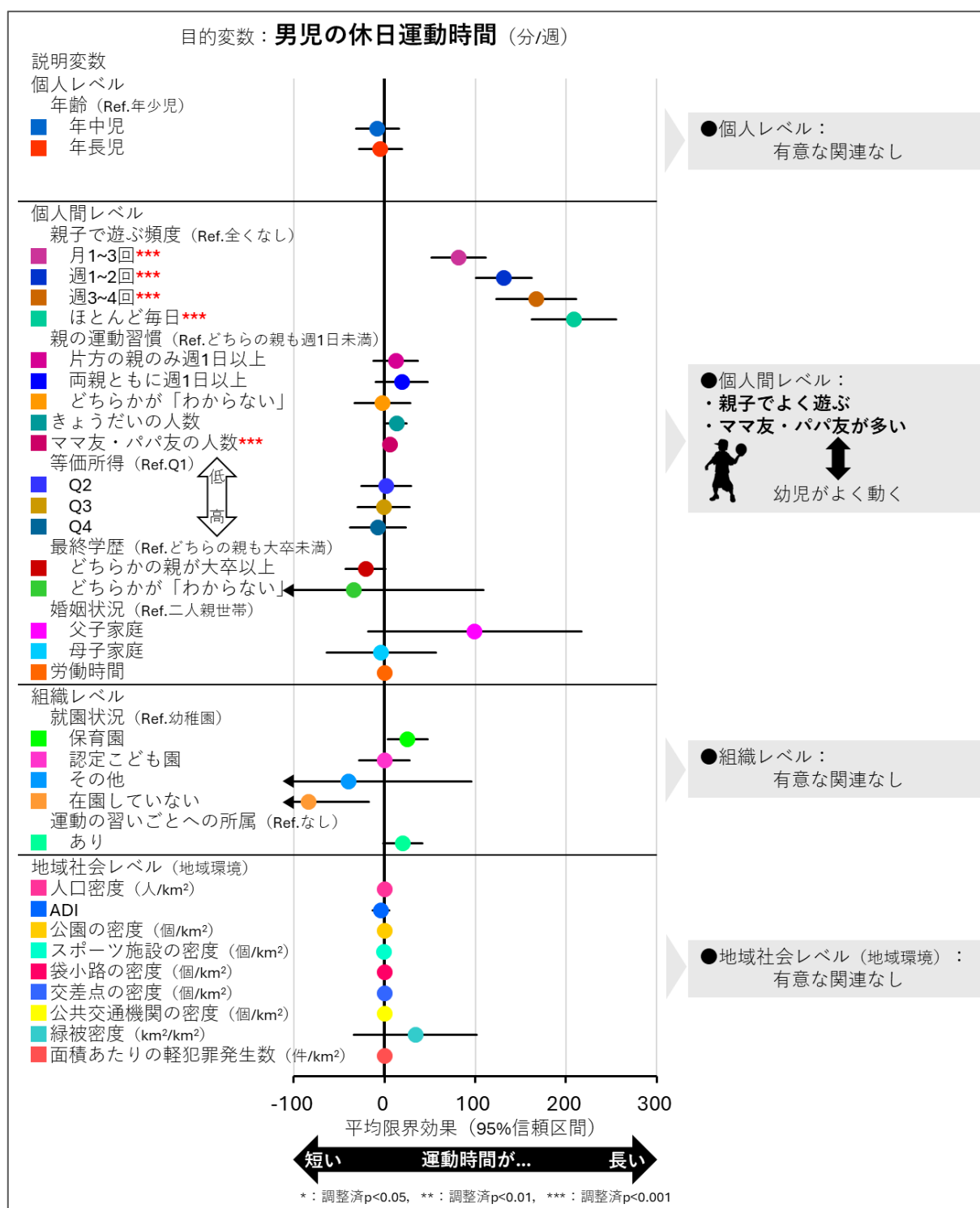
●男子の休日運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

図表2-33に男子における休日運動時間に関連する要因を示した。休日の運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、男子の休日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが休日の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、男子の休日の運動時間が長い傾向が示され、保護者同士のネットワークが休日の活動の幅を広げる要因となっている可能性がある。

【図表2-33】 男子における運動時間に関連する要因(休日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

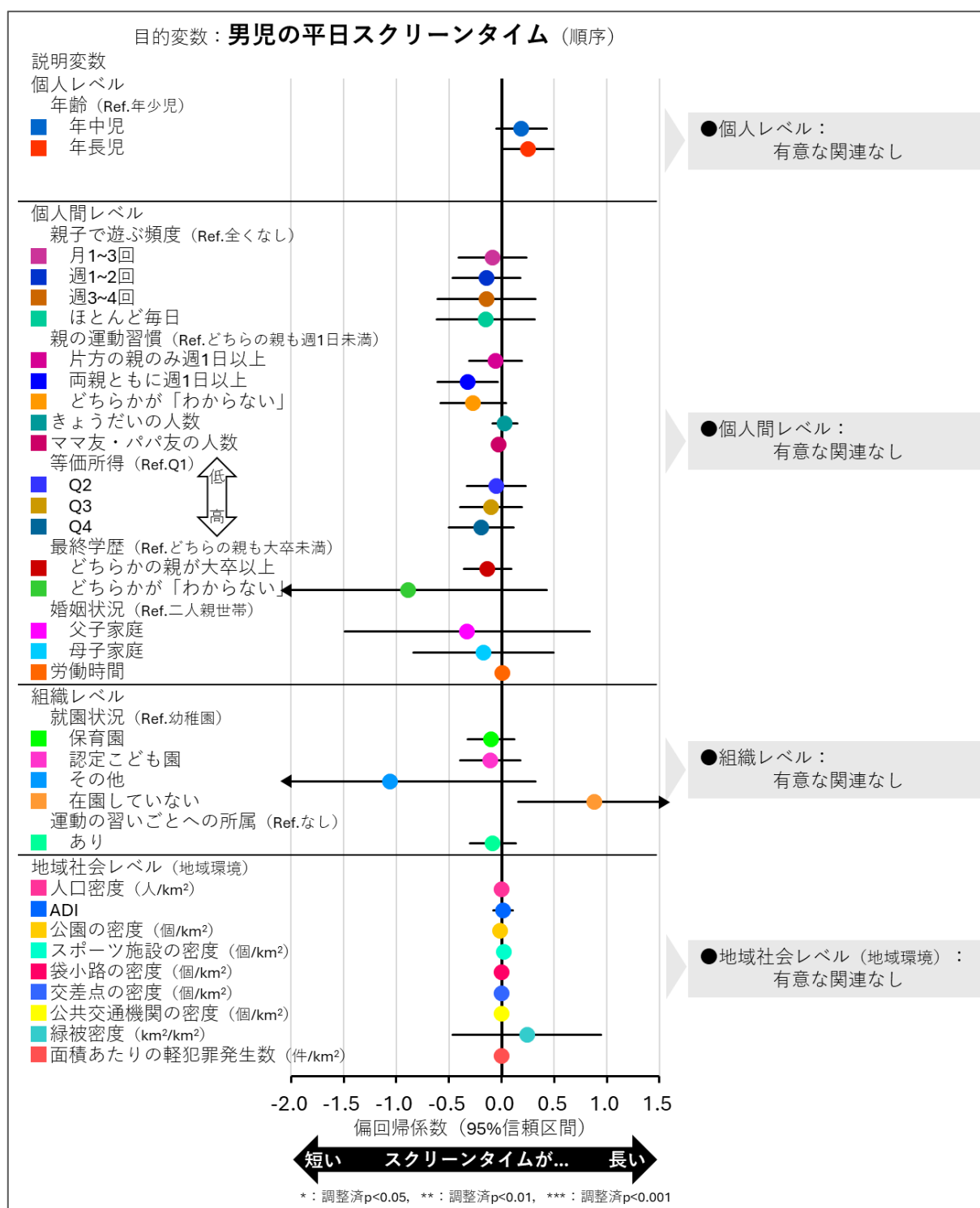
5-5) 男子の平日のスクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

- ・ 男子の平日スクリーンタイムは、特定の要因と有意な関連がみられなかった

図2-34に男子の平日スクリーンタイムに関連する要因を示した。本研究では、男子の平日スクリーンタイムに関連する要因を分析したが、有意な関連を示す変数は確認されなかった。これは男子の平日スクリーンタイムが特定の家庭環境や社会的要因に左右されるのではなく、各家庭のライフスタイルや日常の過ごし方といった個別の要因によって大きく異なる可能性を示唆している。

【図表2-34】 男子の平日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さに及ぼす影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-6) 男子の休日のスクリーンタイムに関連する要因

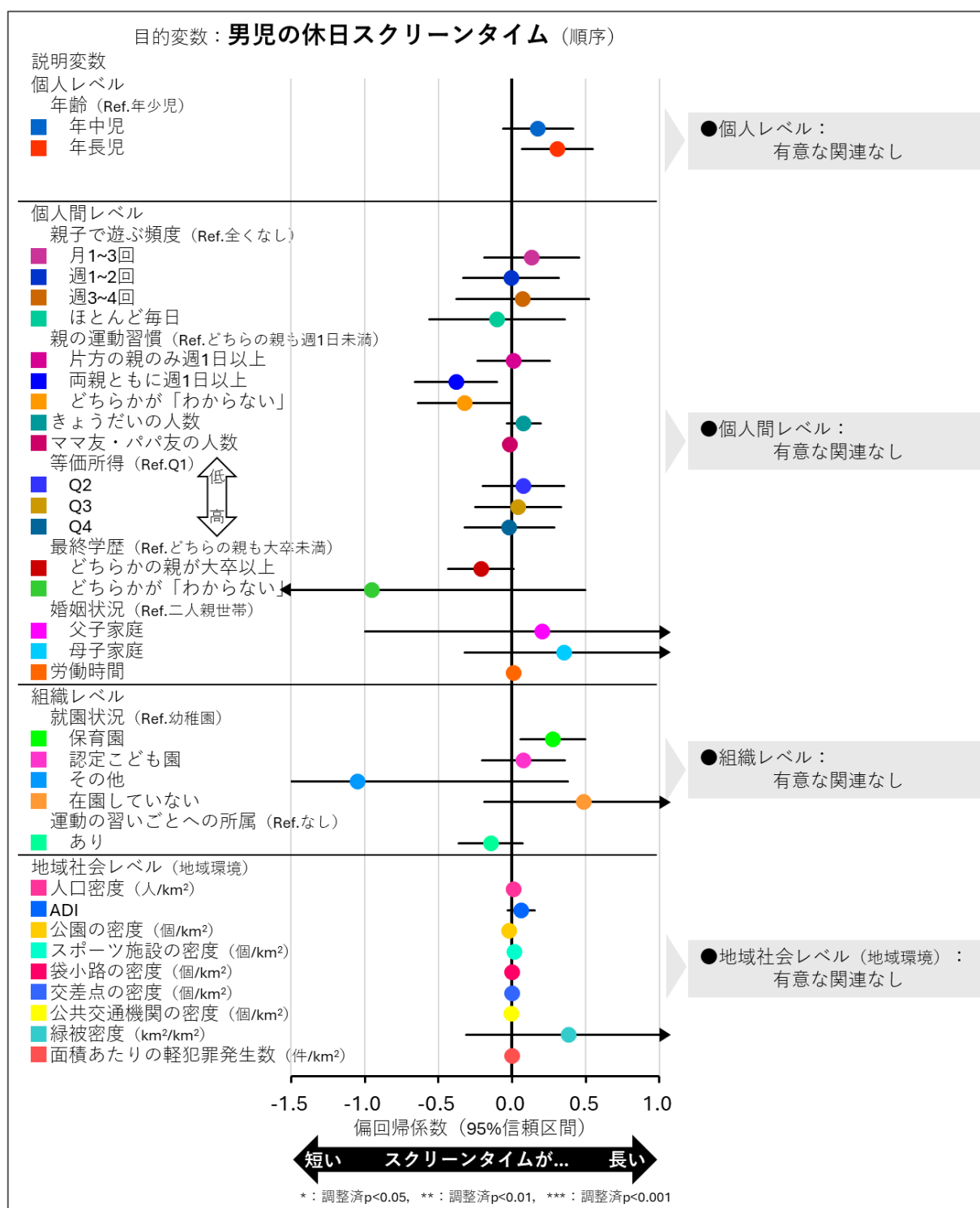
【ポイント】

- ・ 男子の休日スクリーンタイムは、特定の要因と有意な関連がみられなかった

図2-35に男子の休日スクリーンタイムに関連する要因を示した。本研究では、男子の休日スクリーンタイムに関連する要因を分析したが、有意な関連を示す変数は確認されなかった。この結果は、平日と同様に、休日のスクリーンタイムが特定の家庭環境や社会的要因によって左右されるというよりも、各家庭のライフスタイルや子どもの自由な時間の過ごし方に影響されている可能性を示唆している。

また、休日は平日と異なり、家族での過ごし方やレジャーの選択肢が多様であることから、スクリーンタイムに影響を与える要因は一概には特定できないと考えられる。

【図表2-35】 男子の休日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さに及ぼす影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

<女子>

5-7) 女子の総運動時間に関連する要因

【ポイント】

●女子の総運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

図表2-36に女子における園外の総運動時間に関連する要因を示した。総運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、女子の総運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが女子の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、運動・スポーツの習いごとに参加している女子では、総運動時間が長いことが示され、組織的な運動活動が日常の運動機会の確保に貢献している可能性が示唆された。

【図表2-36】女子における園外の総運動時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-8) 女子の園外での運動場面ごとにみる関連要因

(外遊び、室内・屋内での運動遊び、運動・スポーツの習いごと)

①女子の外遊び時間に関連する要因

【ポイント】

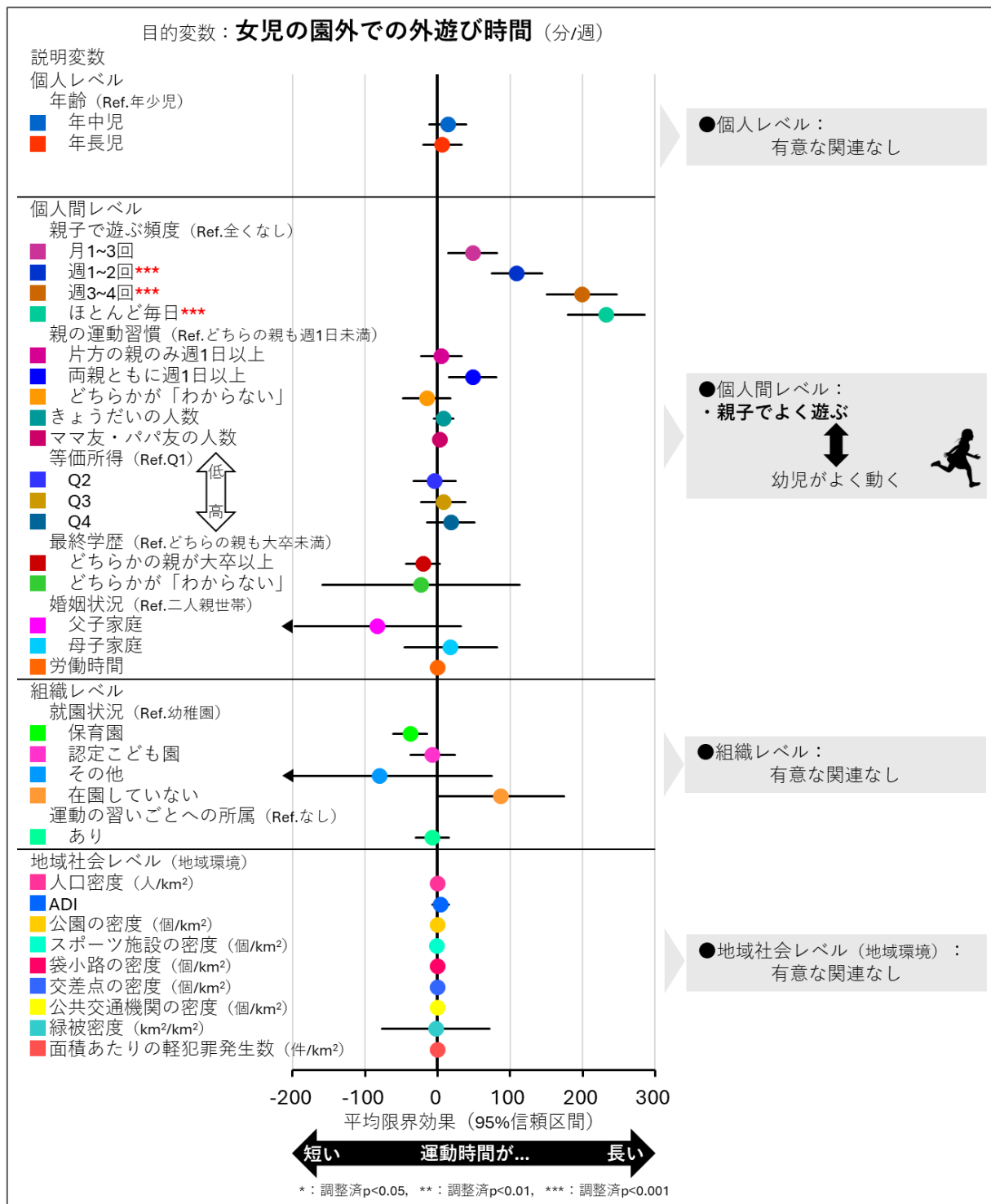
●女子の外遊び時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い

図表2-37に女子における園外の外遊び時間に関連する要因を示した。外遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、女子の外遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが女子の外遊び機会の増加に寄与している可能性が示唆された。

【図表2-37】女子における園外の外遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

②女子の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因

【ポイント】

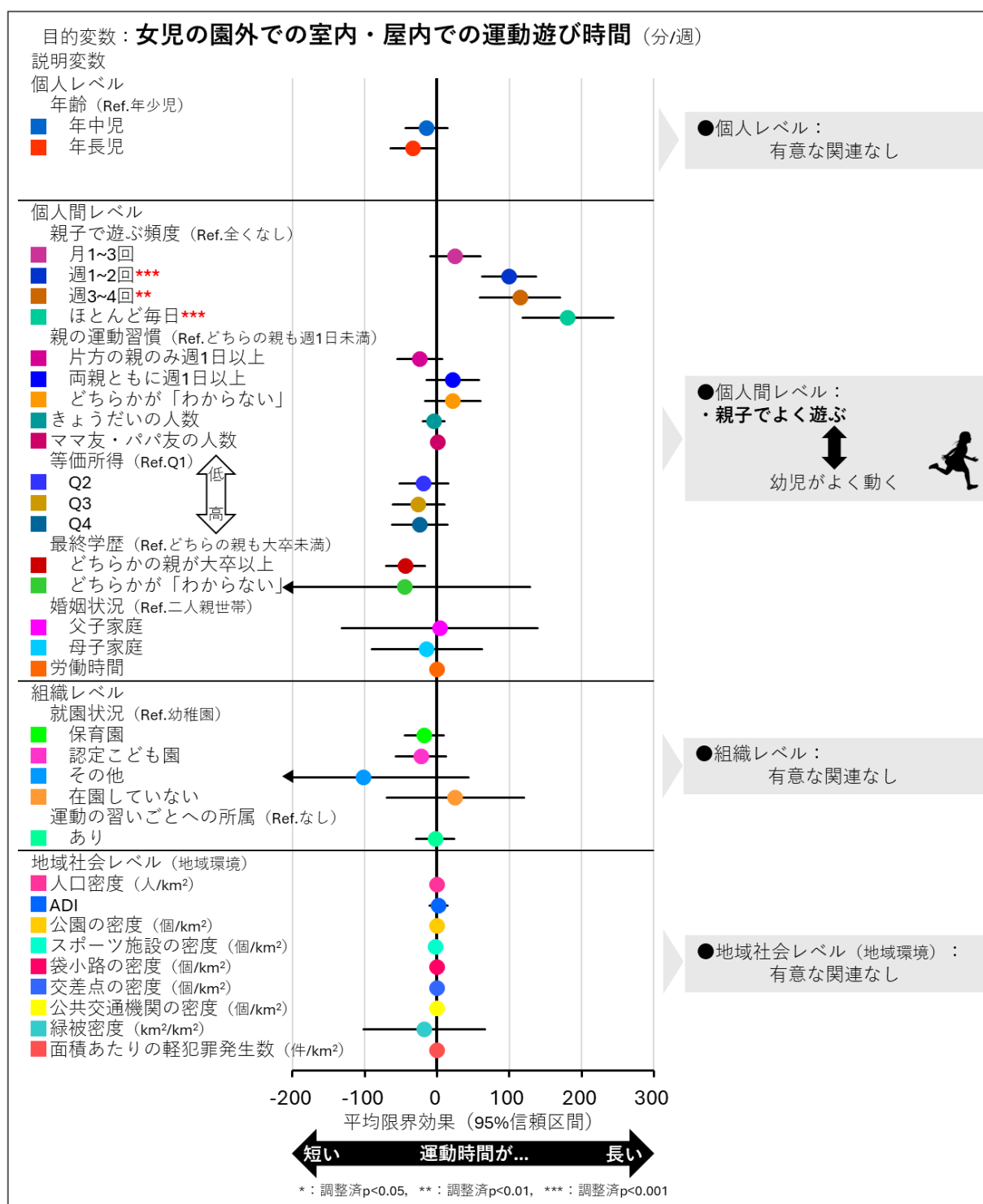
●女子の室内・屋内での運動遊び時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い

図表2-38に女子における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因を示した。室内・屋内での運動遊び時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、女子の室内・屋内での運動遊び時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが女子の室内・屋内での運動遊びの機会の増加に寄与している可能性が示唆された。

【図表2-38】 女子における園外の室内・屋内での運動遊び時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

③女子における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因

【ポイント】

●女子の運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 年齢が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

●女子の運動・スポーツの習いごとの実施時間が短いことと関連がみられた要因

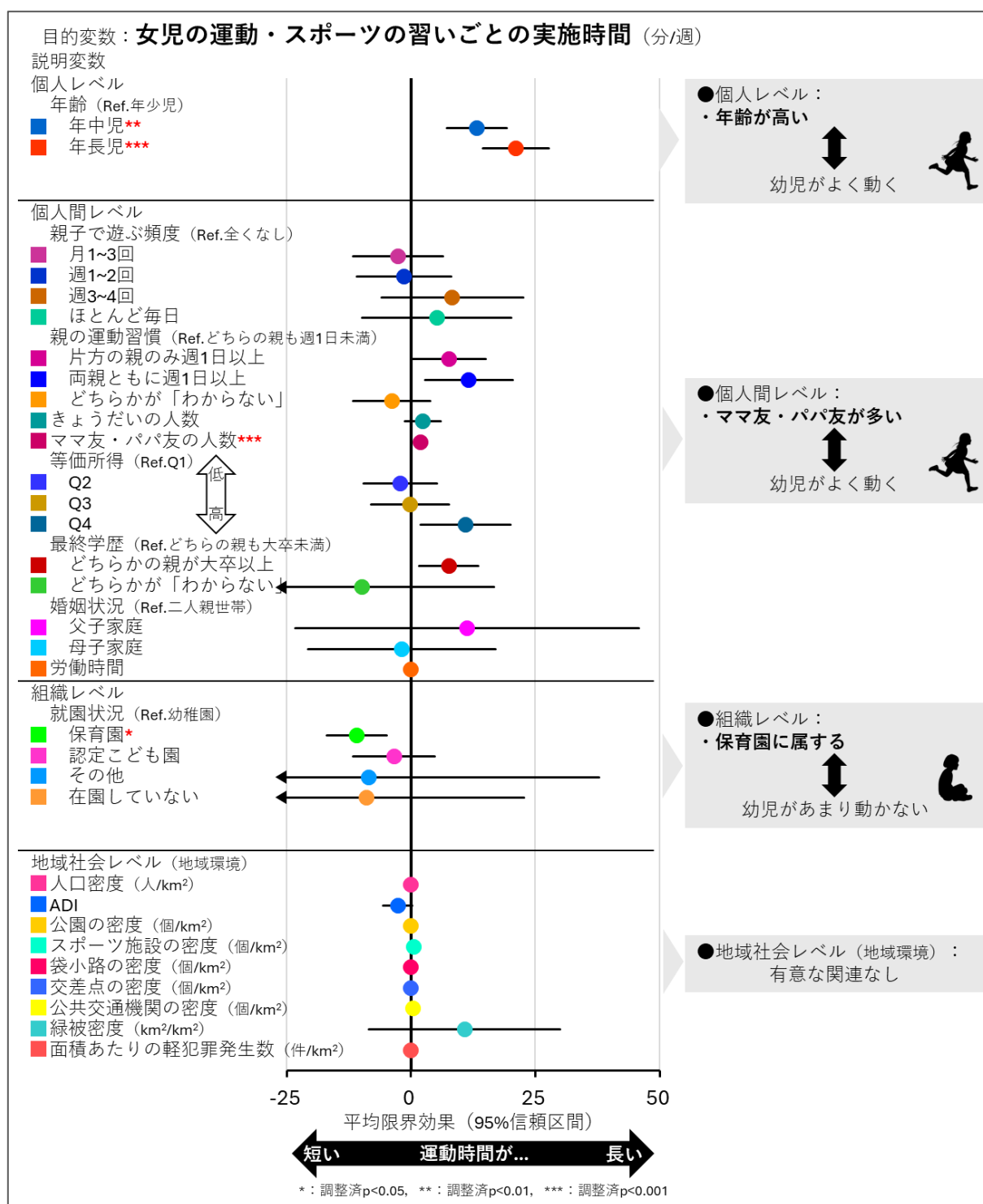
- ・ 保育園に就園している

図表2-39に女子における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因を示した。運動・スポーツの習いごとの実施時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは年齢が、個人間レベルでは保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、組織レベルでは保育園への就園が関連要因として確認されたが、地域社会レベル(近隣環境)においては有意な関連はみられなかった。

特に、年齢が高い女子ほど、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長い傾向がみられ、成長とともに運動機会が増える可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが女子のスポーツ活動の機会に影響を与えている可能性がある。

一方で、保育園に就園している女子では、運動・スポーツの習いごとの実施時間が短い傾向が認められた。

【図表2-39】 女子における運動・スポーツの習いごとの実施時間に関連する要因



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-9) 女子の平日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

●女子の平日運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ 運動・スポーツの習いごとに参加している

●女子の平日運動時間が短いことと関連がみられた要因

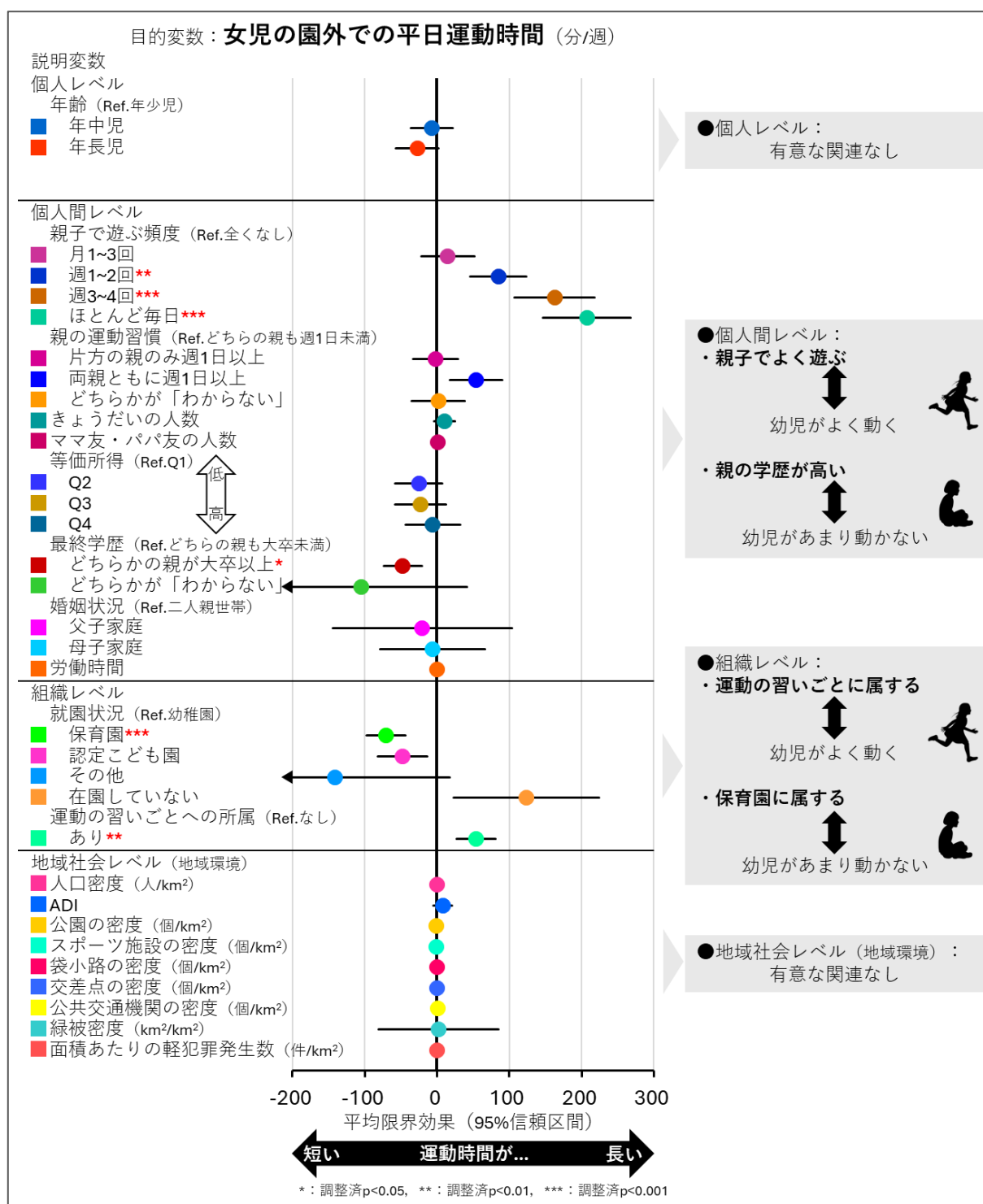
- ・ 親の最終学歴が高い
- ・ 保育園に就園している

図表2-40に女子における園外の平日運動時間に関連する要因を示した。平日の運動時間と関連がみられた要因として、個人レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が、組織レベルでは運動・スポーツの習いごとへの参加があげられた。一方、個人レベルや地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、女子の平日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、運動・スポーツの習いごとに参加している女子では、平日の運動時間が長いことが示され、組織的な運動活動が平日の運動機会の確保に貢献している可能性がある。

一方で、親の最終学歴が高い家庭では、女子の平日の運動時間が短いことが示された。また、保育園に就園している女子では、平日の運動時間が短い傾向が認められた。

【図表2-40】 女子における園外の運動時間に関連する要因(平日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差):推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間):統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス):基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標):地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-10) 女子の休日の運動時間に関連する要因

【ポイント】

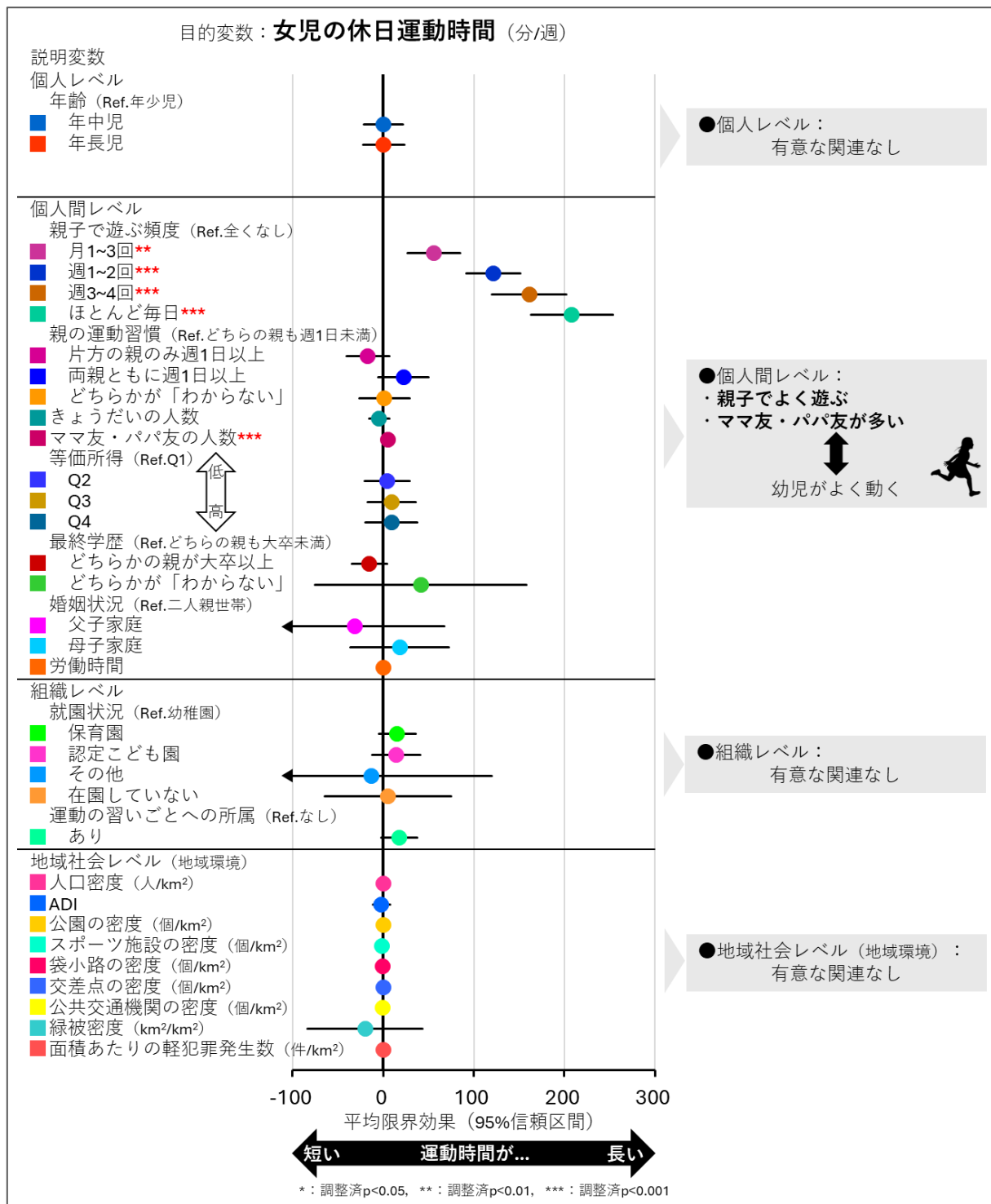
●女子の休日運動時間が長いことと関連がみられた要因

- ・ 親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い
- ・ ママ友・パパ友の人数が多い

図表2-41に女子における園外の休日運動時間に関連する要因を示した。休日の運動時間と関連がみられた要因として、個人間レベルでは親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度や保護者同士のネットワーク(ママ友・パパ友の人数)があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が高い家庭では、女子の休日の運動時間が長い傾向がみられ、家庭内での親子の関わりが休日の運動機会の増加に寄与している可能性が示唆された。また、ママ友・パパ友の人数が多い家庭では、女子の休日の運動時間が長いことが示され、保護者同士のネットワークが休日の活動の幅を広げる要因となっている可能性がある。

【図表2-41】 女子における運動時間に関連する要因(休日)



注)AME(平均的限界効果):ある要因が変化したときに、幼児の運動時間などの結果がどの程度変わるかを示す指標

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が表示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-11) 女子の平日のスクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

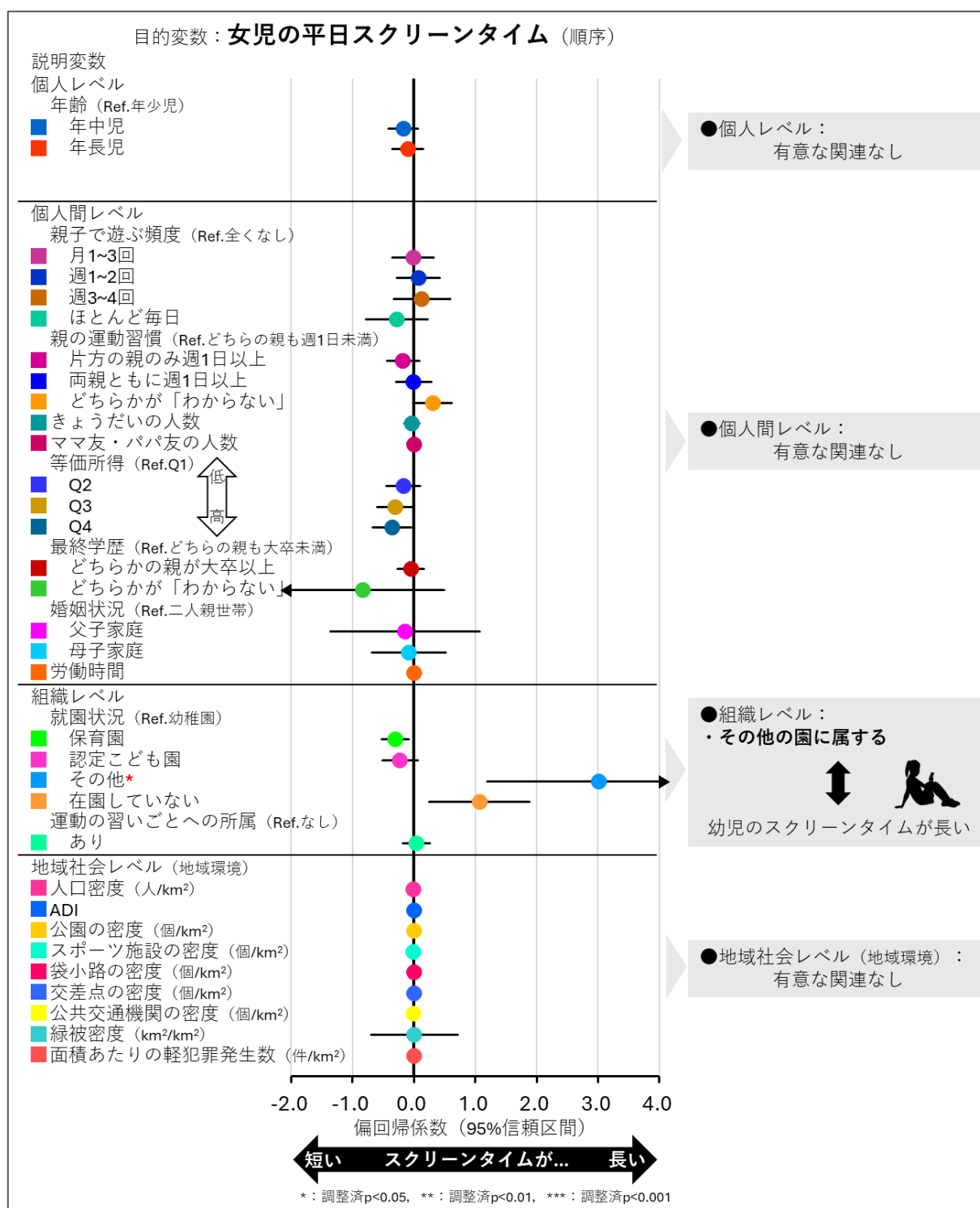
●女子の平日スクリーンタイムが長いことと関連がみられた要因

- ・「その他の園」に就園している

図表2-42に女子における平日のスクリーンタイムに関連する要因を示した。平日のスクリーンタイムと関連がみられた要因として、組織レベルでは「その他の園」への就園があげられた。一方、個人レベル、個人間レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、「その他の園」に就園している女子では、平日のスクリーンタイムが長い傾向が認められた。

【図表2-42】 女子の平日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さおよび影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref.)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

5-12) 女子の休日のスクリーンタイムに関連する要因

【ポイント】

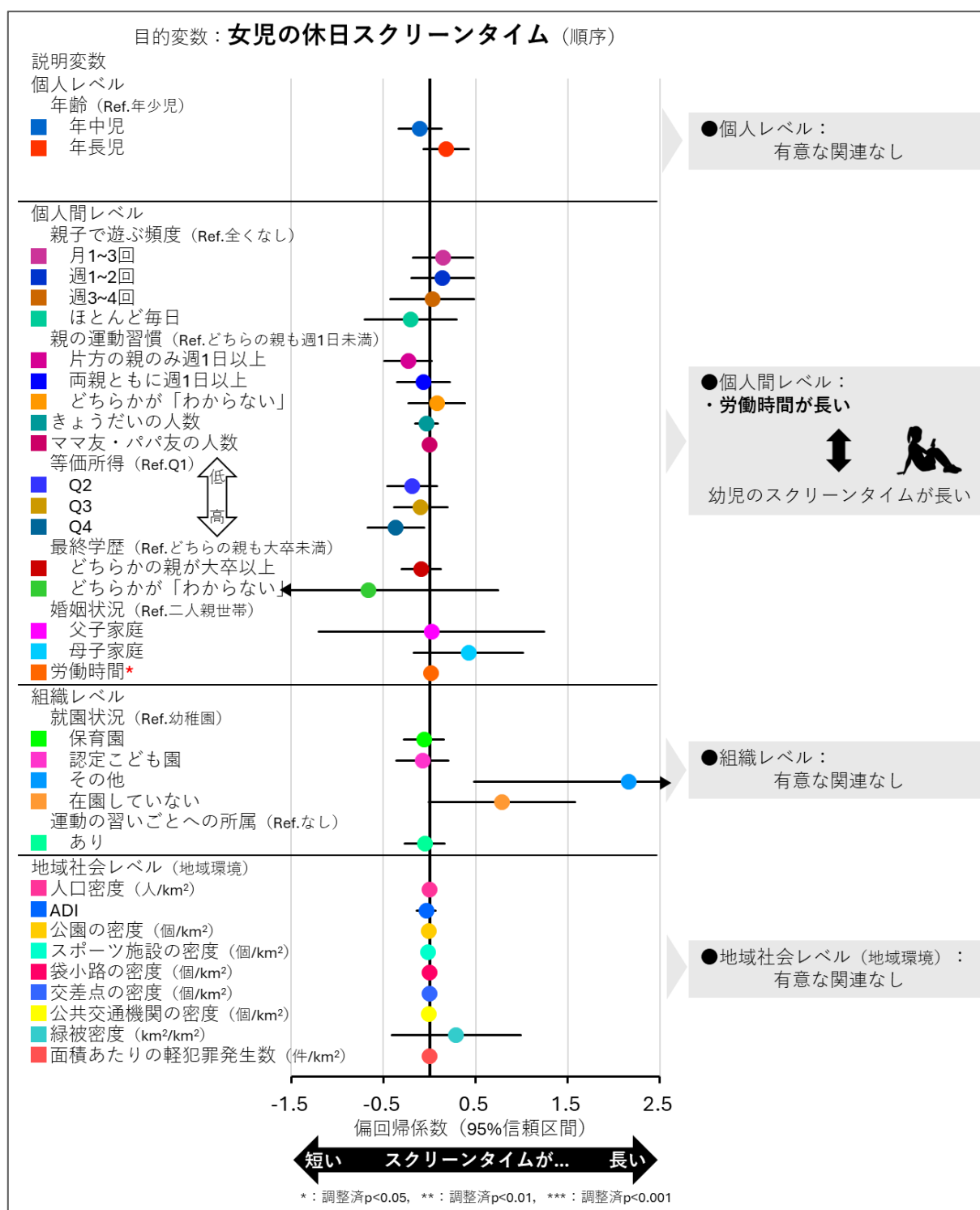
●女子の休日スクリーンタイムが長いことと関連がみられた要因

- ・ 両親の労働時間が長い

図表2-43に女子における休日のスクリーンタイムに関連する要因を示した。休日のスクリーンタイムと関連がみられた要因として、個人間レベルでは両親の労働時間があげられた。一方、個人レベル、組織レベル、および地域社会レベル(近隣環境)については、有意な関連は確認されなかった。

特に、両親の労働時間が長い家庭では、女子の休日のスクリーンタイムが長い傾向がみられ、保護者の就労環境が子どものメディア使用行動に影響を与えている可能性が示唆された。そのため、保護者の負担を軽減しつつ、子どもが多様な活動に参加できるよう、地域の遊び場の活用促進、一時的な子どもの預かり支援、親子で参加できるイベントの開催など、生活環境の整備や支援の拡充が求められる。

【図表2-43】 女子の休日スクリーンタイムに関連する要因



注)偏回帰係数:各要因がスクリーンタイムの長さおよび影響を示す。右にあるほどスクリーンタイムが長く、左にあるほど短くなる傾向がある。

SE(標準誤差): 推定値のばらつきを表し、値が小さいほど推定の精度が高いことを意味する。

CI(信頼区間): 統計的に信頼できる範囲を示し、この範囲内に真の値がある可能性が高い。

Ref(リファレンス): 基準となるグループ。例えば、「幼稚園」を基準(Ref)とした場合、「幼稚園に対してどれくらいの差があるか」という形で結果が示される。

ADI(地理的剥奪指標): 地域の経済的・社会的な格差を示す指標。数値が高いほど、生活環境が厳しい地域を意味する。

3. まとめ

本研究の結果から、幼児の園外での運動時間と近隣環境要因との間に有意な関連は確認されなかった。幼児の運動実施に近隣環境が主要な要因ではない可能性があることから、エコロジカルモデルの枠組みに沿って分析を行った結果、以下の知見が得られた。

(1) 個人レベル要因

幼児の年齢が高いことが運動・スポーツの習いごとの実施時間が長いことと関連した。一方で、都市部においては年齢が高い子どもほど、室内・屋内での運動遊び時間が短くなる傾向があり、年齢に応じて運動する状況や場所が異なることが明らかになった。したがって、幼児期の発達段階に応じた適切な運動の機会を提供することが重要であると考えられる。

また、男女の違いについても分析したところ、男子に比べて女子のスクリーンタイム(テレビやタブレットの視聴時間)が平日・休日ともに短いことが確認された。この結果から、特に男子を対象にスクリーンタイムを減らし、より体を動かす機会を増やすための対策が必要であることが示唆された。

(2) 個人間レベル要因

本研究では、幼児の運動時間に最も強く関連していたのは、家族や親しい人との関わりといった「個人間レベルの要因」であった。つまり、このような要因に働きかけることが、幼児の運動時間を維持・向上させる上で重要であるかもしれない。

①親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度:

特に、親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が幼児の運動時間に最も強い影響を与えていることが明らかになった。これまでの研究でも、親子で一緒に運動することが子どもの運動習慣の定着につながることを示されており、親子運動教室などの取り組みも広く実施されている。本研究では、全国規模の調査を通じて、こうした親子での運動機会を増やすことが、幼児の運動時間を確保する上で有効である可能性が示唆された。

②両親の運動習慣:

親の運動習慣は、幼児の総運動時間や外遊び時間、平日運動時間といった運動量に対して、有意な正の関連があることが明らかになった。これは、親が運動する習慣を持つことで、親子で一緒に運動するかどうかに関わらず、子どもの運動習慣の形成にも影響を与える可能性を示している。一方で、本研究は横断研究であるため、親の運動習慣が子どもの運動量に影響を与えているのか、あるいは運動量の多い子どもを持つ親が運動習慣を身につけやすいのかといった因果関係の逆転も考えられる点には留意する必要がある。

③きょうだいの人数:

きょうだいの人数は、特に都市部における平日の運動時間と有意な正の関連があることが明らかになった。平日は、運動・スポーツの習いごとなどの組織的な活動よりも、一人での遊びや近隣のコミュニティでの運動遊びが多くなると考えられる。そのような環境において、親だけでなくきょうだいも身近な遊び相手となることで、幼児の運動時間を確保する重要な要素になっている可能性が示唆された。

④ママ友・パパ友の人数:

本研究では、子どもを通じて知り合い、連絡をとったり気軽に話をしたりできるママ友・パパ友の人数が幼児の平日・休日の総運動時間、外遊び時間、運動・スポーツの習いごとで体を動かす時間と有意に正の関連を示した。これは、子どもを通じた親同士のつながり(いわゆる「親同士のソーシャルキャピタル」)が、幼児の運動時間の確保や遊びの質を高める上で機能している可能性を示唆する。

すなわち、親同士が情報交換や一緒に外出機会を共有することで、幼児が多様な運動・遊びの場に参加しやすくなったり、家庭以外のコミュニティで身体活動を行うきっかけが増えたりするものと考えられる。したがって、親同士の連帯感や交流を深める施策の推進が、子どもの運動量増加にも寄与する可能性が示された。

一方で、子ども同士と一緒に活動することや、運動・スポーツの習いごとをさせることによって親同士も仲良くなるような、双方向の効果も考えられうるため、慎重な解釈と今後の検討が必要となる。

⑤親の最終学歴・等価所得:

本研究の結果によると、親の最終学歴が高いことは、平日の総運動時間や室内・屋内での運動時間で負の関連を示す一方、習いごとの運動時間に関しては正の関連を示した。すなわち、学歴が高い世帯では、子どもの日常的な運動遊びや自由な身体活動の時間が短い一方で、計画的に習いごとへ通わせる傾向があると考えられる。

また、世帯の等価所得が高いほど幼児の習いごとの運動時間が長いことも示唆された。これは、経済的に余裕がある世帯ほど運動教室やクラブに通わせる機会や選択肢が増えると考えられるためである。したがって、幼児の身体活動を拡充するうえでは、こうした経済的背景要因を踏まえた運動推進策の検討が重要な課題となる。

⑥両親の労働時間:

両親の労働時間に関しては、スクリーンタイム(平日・休日)と正の関連を示した。両親の就労が長時間化すると、子どもの生活リズムが乱れやすくなり、保護者による見守りといった直接的な関わりの時間が確保しづらくなることが背景にあると考えられる。その結果、幼児が自宅でテレビやタブレットなどの機器に接触しやすくなり、スクリーンタイムが増加している可能性がある。

今後は、両親の就労状況を踏まえながら、保護者が帰宅後や休日においても幼児と積極的に身体活動を共有できるような支援、あるいは地域や組織レベルでのサポート体制の拡充を図る必要性がある。また、園外だけで十分な身体活動を確保することは難しく、保育園や幼稚園と家庭が情報を共有しながら、運動遊びの充実など、在園中における積極的な身体活動促進と並行して支援を進めることも重要である。

一方で、本研究において幼児の運動に関連する要因とスクリーンタイムに関連する要因は異なっていることも示唆された。すなわち、幼児の運動習慣形成と、スクリーンタイムの制限に対しては、施策として異なるアプローチが必要となる可能性がある。

(3) 組織レベル要因

本研究では、保育園や認定こども園といった就園形態や、運動系の習いごとに通っているか否かといった組織レベルの要因が、幼児の運動時間やスクリーンタイムと関係を持つことが示された。これらの組

織レベル要因は、家庭単位の実践だけでは補いきれない部分を担うと同時に、幼児の運動実施の機会を左右する重要な環境要因でもあると考えられる。

①就園状況：

保育園や認定こども園に通う幼児は、総運動時間や平日運動時間が短い傾向がみられた。一方で、未就園の幼児や「その他の園」に通う幼児はスクリーンタイムが長い傾向があった。これらの結果から、就園先の特徴に加え、保護者の就労状況が幼児の運動時間やスクリーンタイムに影響を与えている可能性が示唆される。未就園の幼児は、保育園や幼稚園のように屋外活動や友達との遊びの機会が少なくなり、スクリーン視聴の時間が長くなる可能性がある。そのため、保護者の多様なニーズに対応した保育サービスや地域支援の充実が、幼児の運動量確保やスクリーンタイム短縮に寄与すると考えられる。

また、本研究では園外での運動時間に着目したが、保育園や認定こども園では就園時間内に一定の運動機会が確保されている可能性もあり、今後は総合的な運動時間の検討が求められる。

②運動・スポーツの習いごとの有無：

「全国の幼児(3～6歳)を対象とした運動実施状況に関する調査研究」(2024)によると、運動・スポーツの習いごとをしている幼児は、全体でおよそ3人に1人であった。年齢が上がるにつれてその割合は増え、年長児では半数近くになる(男子 43%、女子 46%)。多くの家庭が運動・スポーツの習いごとに頼っている現状がある。

一方で、習いごとは家庭の経済的余裕や、送り迎えなどの保護者の時間的余裕が必要とされることが多く、誰もが利用できるわけではない。そのため、運動・スポーツの習いごとを活用した身体活動促進は、公的な補助や地域社会の支援体制整備とセットで検討されるべき課題であるといえる。

(4) 地域社会レベル要因

本研究の新たな発見の一つは、幼児の運動習慣や生活習慣と「地域社会レベル」の関連性について検討を行った点である。しかし、分析の結果、地域社会の特性(居住地域の違いなど)と幼児の運動時間やスクリーンタイムとの関連は確認されなかった。つまり、幼児の運動習慣やスクリーンタイムは、地域全体の環境よりも、個人の年齢や性別、家族の関わり、通園先や運動・スポーツの習いごとといった、より身近な要因によって左右されることが示唆された。

①都市部と郊外との比較：

都市部と郊外では、幼児の運動時間やスクリーンタイムに関連する要因が異なることも明らかになった。郊外ではスクリーンタイムに関連する要因はほとんどみられなかったが、都市部では、両親の労働時間や通園先の種類がスクリーンタイムと関連することが示された。また、都市部では「ママ友・パパ友の数」や「きょうだいの有無」が運動時間に関係するのに対し、郊外では「親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度」や「運動・スポーツの習いごと」が大きな要因となっていた。このことから、住んでいる地域によって、子どもの遊び環境や親同士の交流機会、移動手段などに違いがあることがうかがえる。

②社会経済的要因の地域差：

郊外では「親の学歴」、都市部では「世帯の収入(等価所得)」が習いごとを含む運動時間と関連して

いた。学歴は「知識や価値観」に、収入は「資源へのアクセス」に影響を与える指標とされている。つまり、郊外と都市部では、親が子どもの運動にどのような形で関与するかに違いがある可能性が考えられる。これらの結果から、一律に同じ対策を講じるのではなく、地域ごとの特性を考慮し、住環境や保護者の状況に応じた運動支援の施策を検討することが重要であると考えられる。

(5) 施策立案に向けた示唆

本研究の結果を踏まえ、幼児の運動習慣を促進するためには、以下の取り組みが求められる。

①親子での運動機会の提供:

親子で一緒に体を動かして遊ぶ頻度が幼児の運動時間に大きく影響するため、親子運動教室などの活動を充実させる。

②保護者同士のネットワーク強化:

ママ友・パパ友のつながりが幼児の運動習慣に影響するため、親同士の交流機会を増やす施策を推進する。

③習いごとへのアクセス支援:

運動・スポーツの習いごとは運動時間の増加に寄与するため、経済的負担を軽減する補助制度の検討が必要。

④地域特性を考慮した施策:

都市部と郊外では影響要因が異なるため、地域の特性に応じた支援策を講じる。

(6) 本研究の限界に関して

本研究は全国規模の横断研究であるため、因果関係を明確に推定できない点が最大の限界である。両親の運動習慣や就労状況と幼児の運動実施との関連についても、逆の因果関係や交絡因子の存在を排除することが難しい。また、回答者の自己申告による調査であるため、運動時間やスクリーンタイムに関して報告バイアスが生じる可能性がある。

さらに、本研究の対象となった地域や保護者の特性は日本全国の平均とは完全には一致しない可能性も考えられる。今後は縦断的なデータ収集や客観的な身体活動量計測の導入、さらに多様な地域や集団を対象とした研究の実施が求められる。

加えて本研究では、幼児の運動時間やスクリーンタイムと各変数における、独立した直接的な関連のみ検討がなされた。しかしながら実際には、地域社会環境が整っていたことによって、地域の運動クラブ活動が活発になり、そこで運動する幼児が増えたなどのように、異なるレベルの変数が間接的に運動時間やスクリーンタイムに対して関わっていた可能性は否定できない。今後は、間接的な影響を示すパスの可能性も考慮した、高度な解析の実施が求められるだろう。これらの課題を補完することで、幼児の運動実施とスクリーンタイムに関するより精緻なエビデンスを積み重ねていく必要がある。

最後に、本研究では、幼児期において運動時間に顕著な性差は認められず、運動・スポーツの習いごとの参加率も男女でほぼ同等であった。しかしながら、成人女性の身体活動実施率の低さが指摘されている現状を踏まえると、小学生以降に生じる運動・スポーツ実施の性差の要因を明らかにすることも、今後の重要な検討課題となる。